

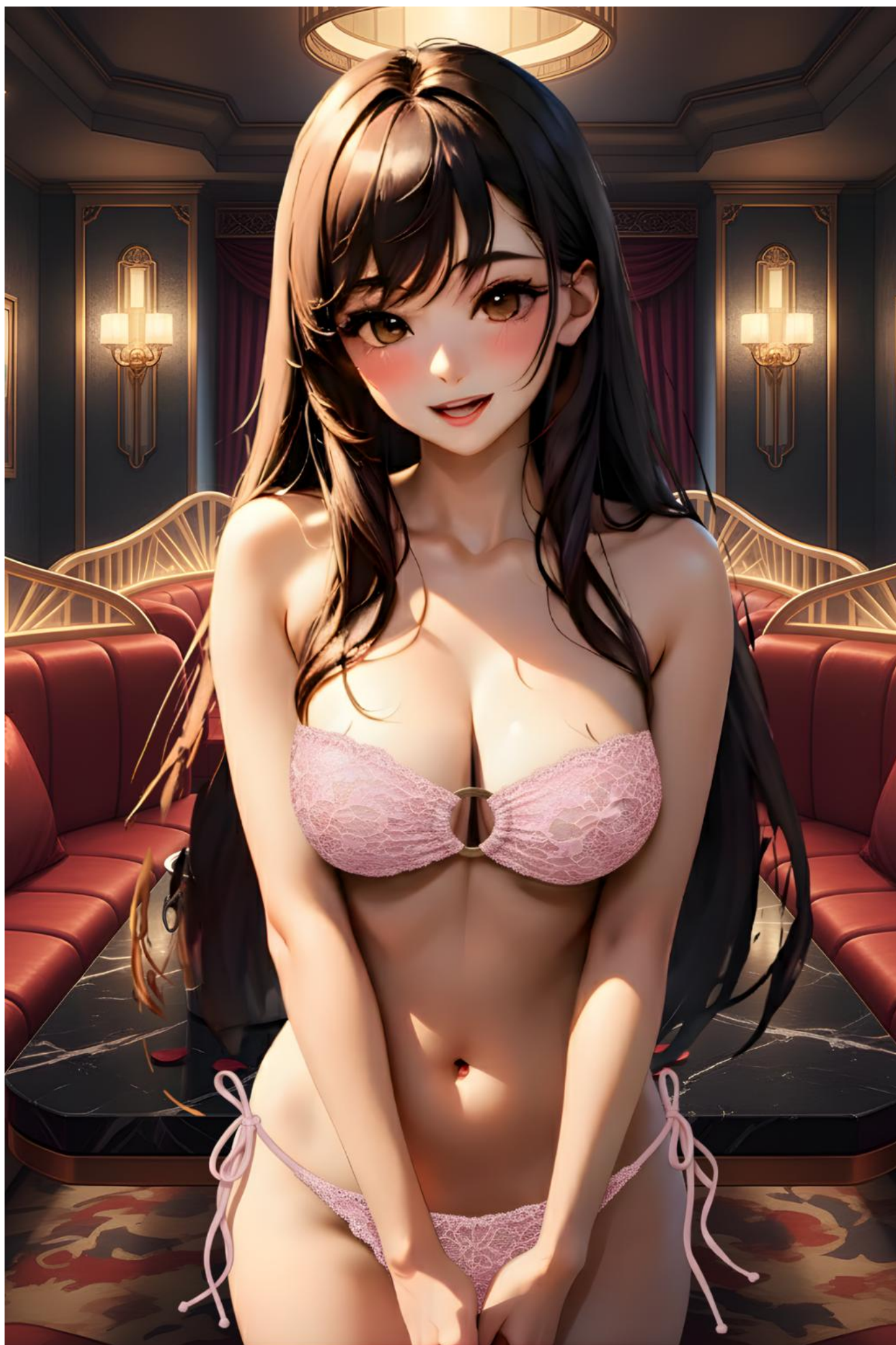
**(スネークの部下のラット!
不審な客や警察の影がないか
小型受信機で周囲の電波を
傍受しているのね)**

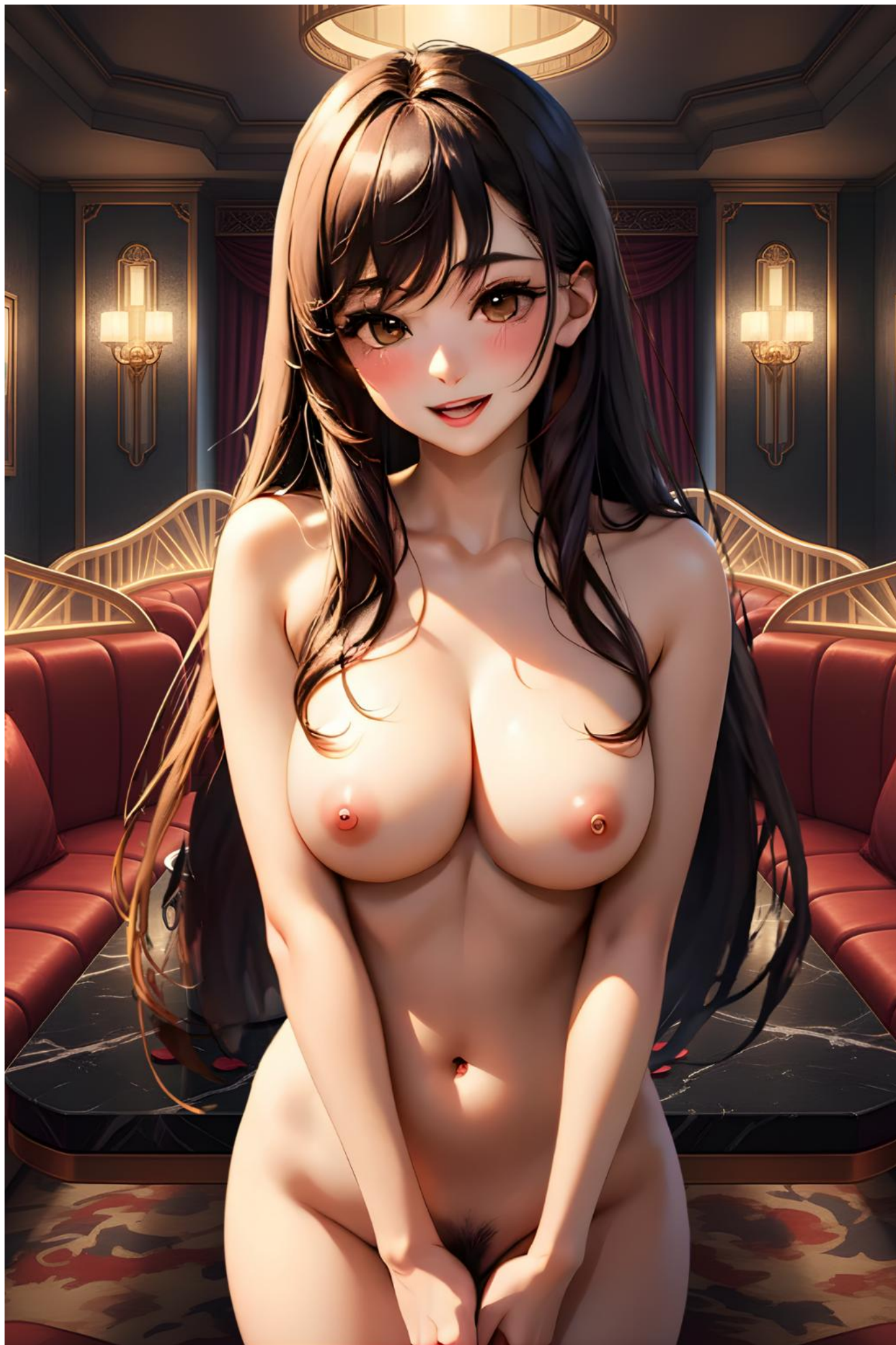



(スネーク!後ろに立っているのが
ボディガードのcongね…)



「片桐様、お待ちしております
今夜も一段と素敵ですね」






A blonde anime-style woman with bangs and a yellow dress is shown from the waist up. She has a blushing expression and is looking slightly to the side. The background is a dimly lit room with dark blue walls, gold-framed sconces, and a red leather sofa. The text is overlaid on the lower half of the image.

「……片桐様、今夜はなんだか
『危険な香り』がしますね
お仕事が絶好調な証拠かしら？
その手袋を外したくなるくらい
私が熱くおもてなしして
差し上げます。覚悟してくださいね」







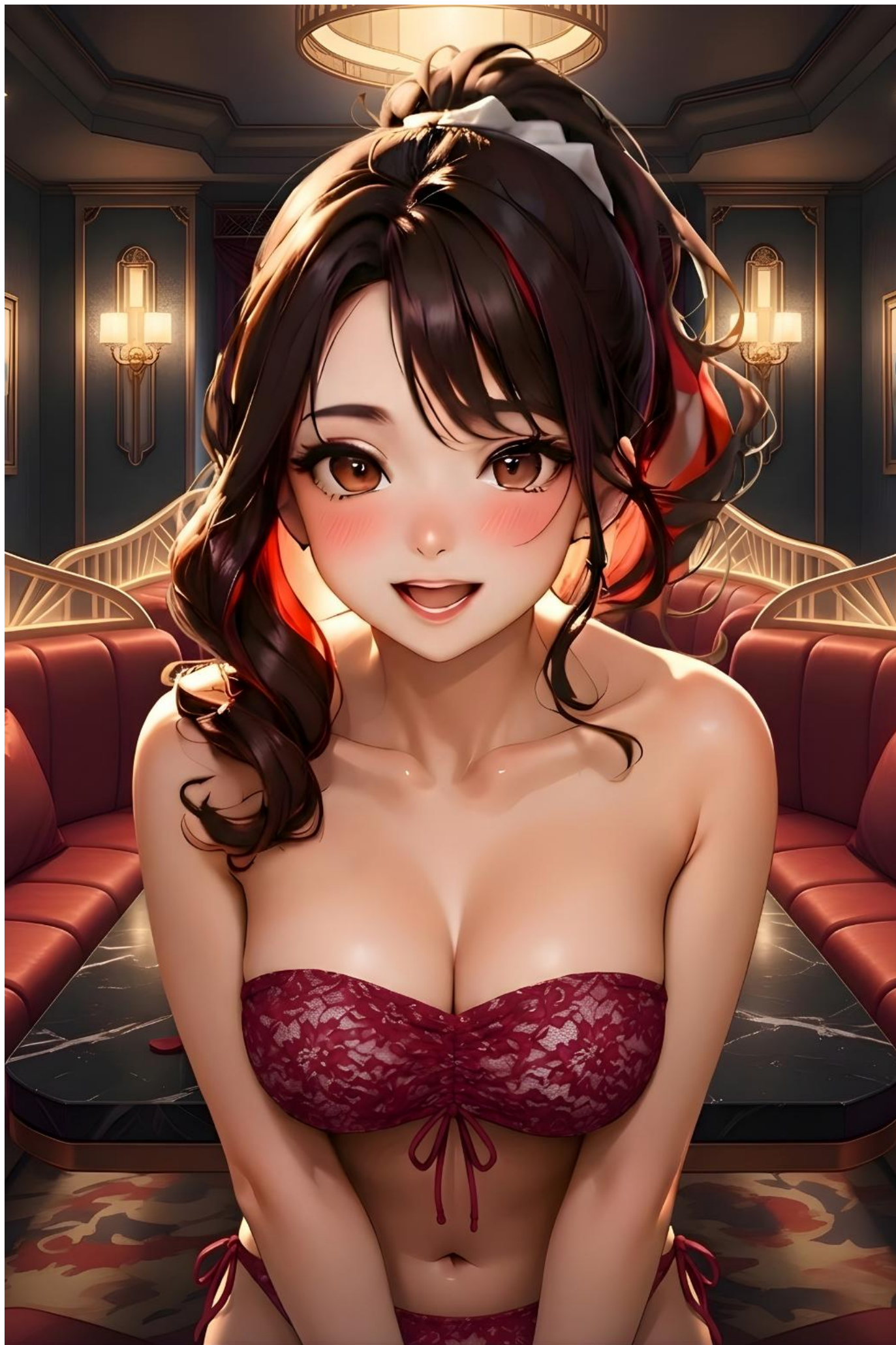
「片桐様、お疲れ様です
お顔を拝見するに、今日も
お忙しい一日だったようです
ね……冷たいおしぼりをご用意し
ました。まずは一息ついて
お仕事のことは忘れてください」








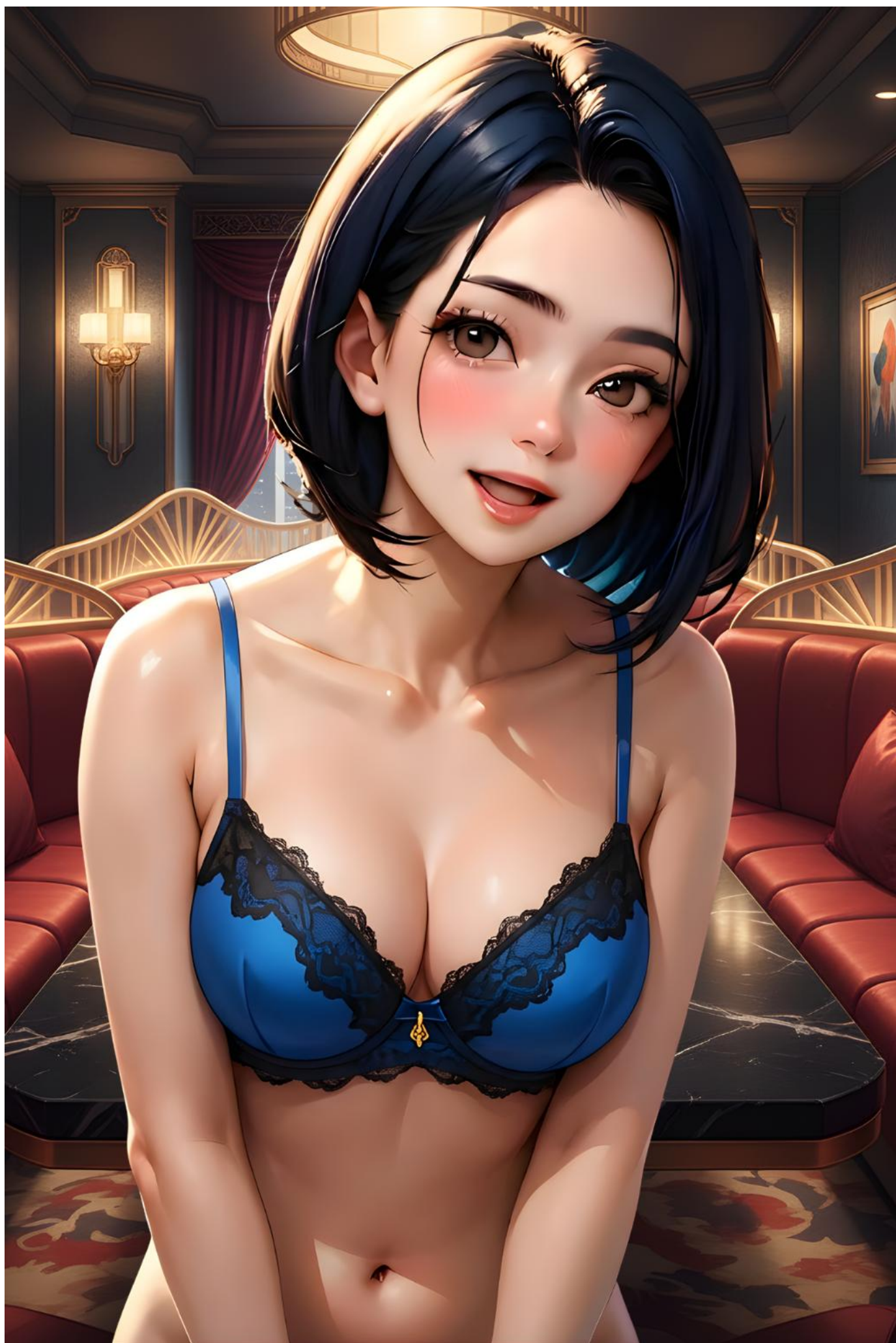
「はじめまして、片桐様。本日より
お世話になります、アヤと
申します……すみません、私
初日なもので、お名前を呼ぶだけで
少し声が震えてしまって…
失礼のないよう精一杯
努めますので、どうか今夜は
よろしくお願いいたします」

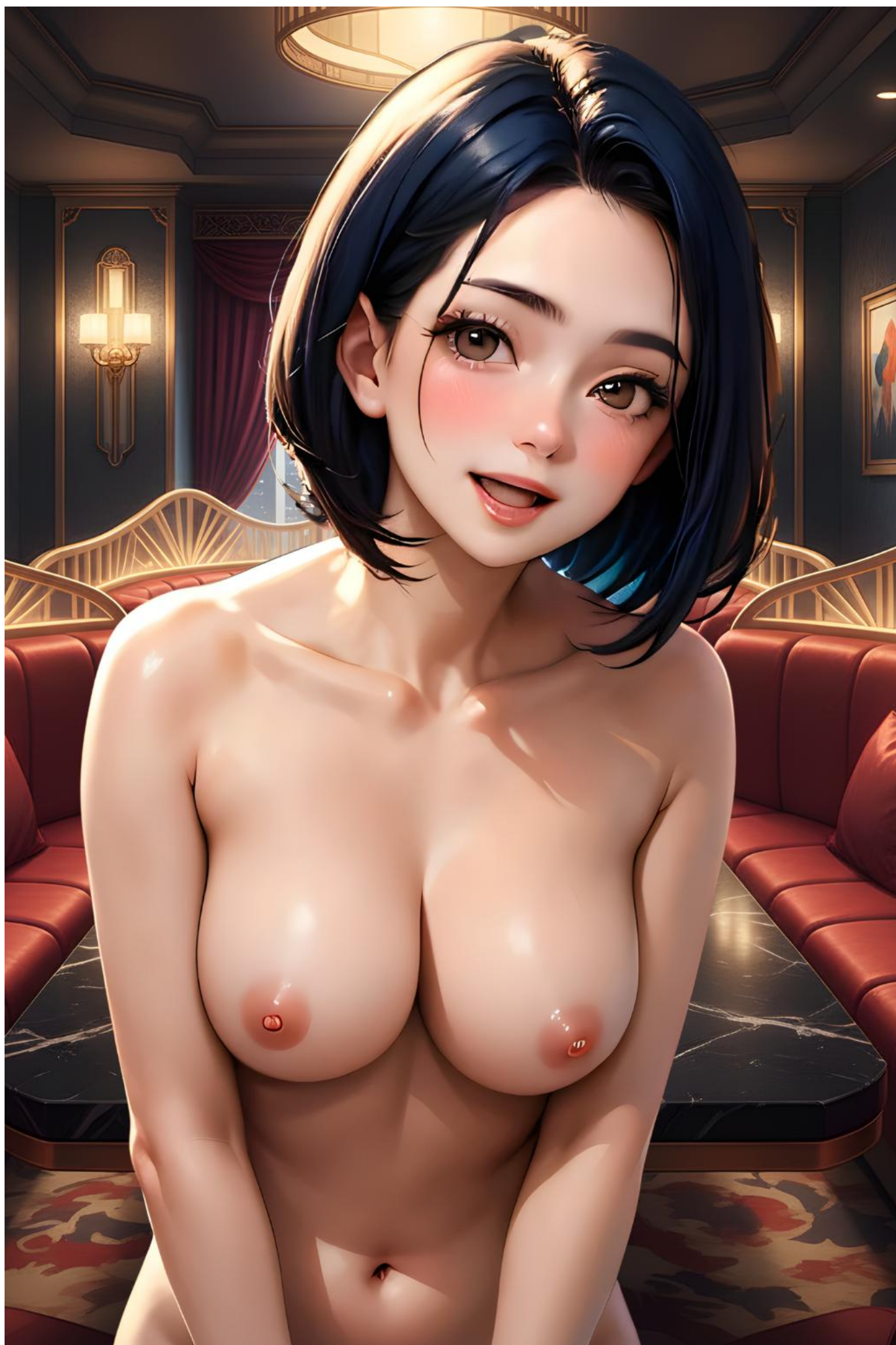






「はじめまして。本日入店しました
サキと申します。少し緊張して
しまって、失礼があったら申し訳
ありません。お近づきの印に
お飲み物をお作りしても
よろしいでしょうか？」





A detailed illustration of a man with dark, wavy hair and a slight smile, wearing a dark suit, white shirt, and dark tie. He is leaning forward slightly, with his right hand partially visible. The background is a dimly lit, elegant lounge or bar with red leather seating, a large window with red curtains, and warm lighting from a chandelier and wall sconces.

「片桐様、お隣にどの子をおつけいたしましょうか？」



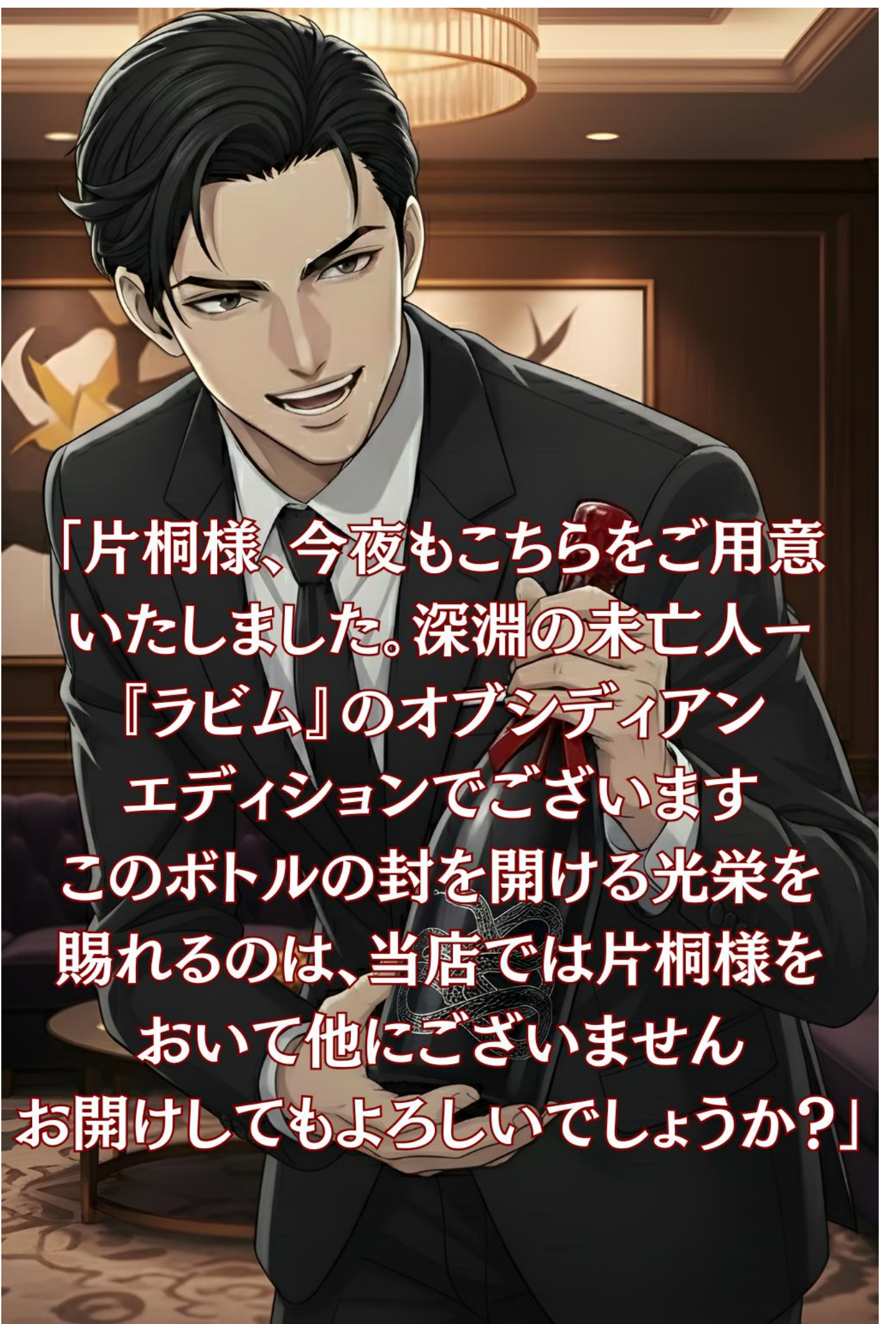
「サキと言ったか？
君が隣に座れ」



「ご指名、ありがとうございます
とても光栄です
お隣、失礼いたします」





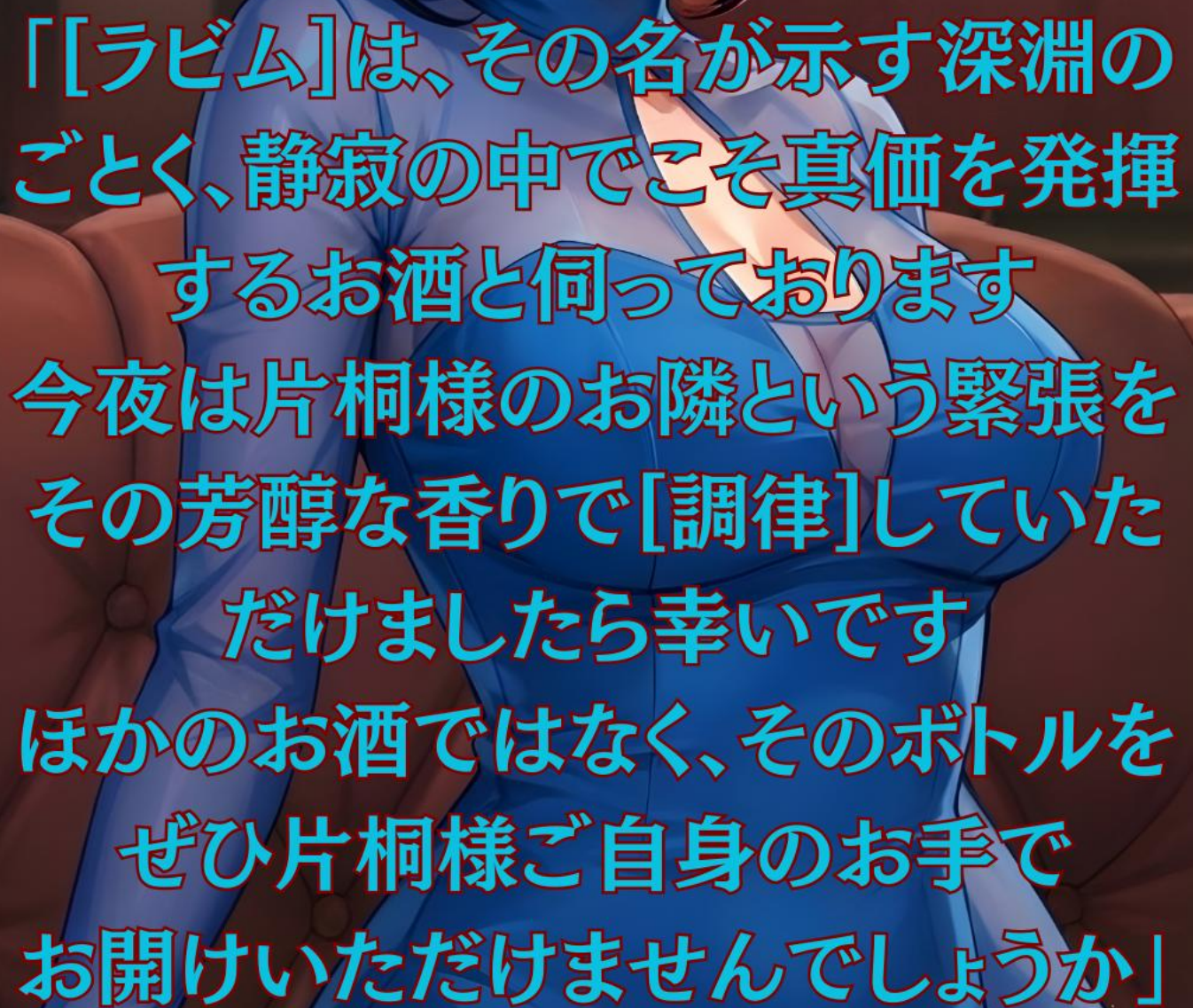
A man with dark hair, wearing a dark suit, white shirt, and dark tie, is smiling and looking towards the viewer. He is holding a dark bottle with a red cap and a decorative label. The background is a dimly lit room with a lamp and a framed picture on the wall.

「片桐様、今夜もこちらをご用意
いたしました。深淵の未亡人—
『ラビム』のオブシディアン
エディションでございます
このボトルの封を開ける光栄を
賜れるのは、当店では片桐様を
おいて他にございません
お開けしてもよろしいでしょうか？」

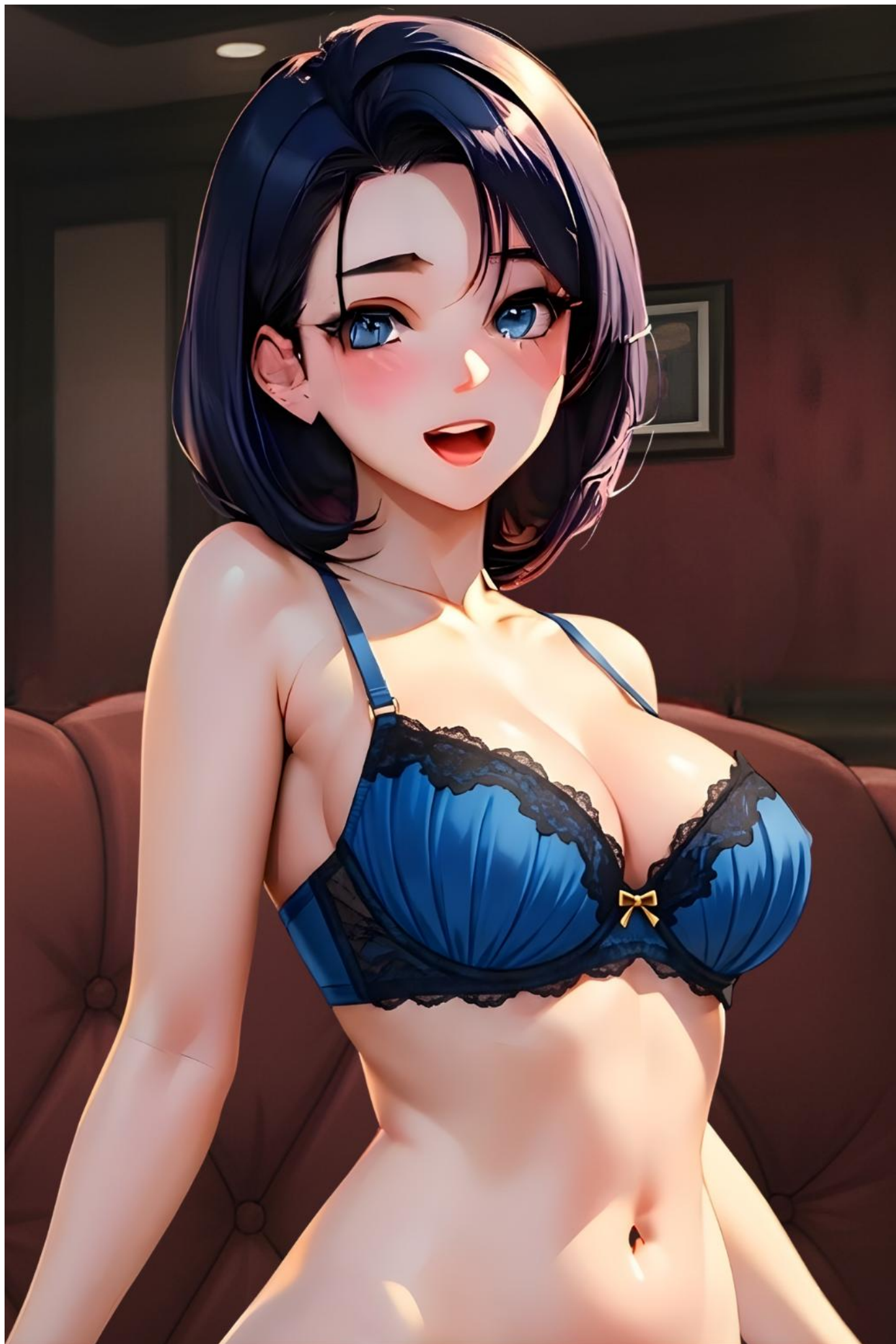




「それもいいが、サキが勧める
酒にしたい
何かおすすすめはあるか？」



「[ラビム]は、その名が示す深淵のごとく、静寂の中でこそ真価を発揮するお酒と伺っております
今夜は片桐様のお隣という緊張をその芳醇な香りで[調律]していただけましたら幸いです
ほかのお酒ではなく、そのボトルをぜひ片桐様ご自身のお手でお開けいただけませんか」



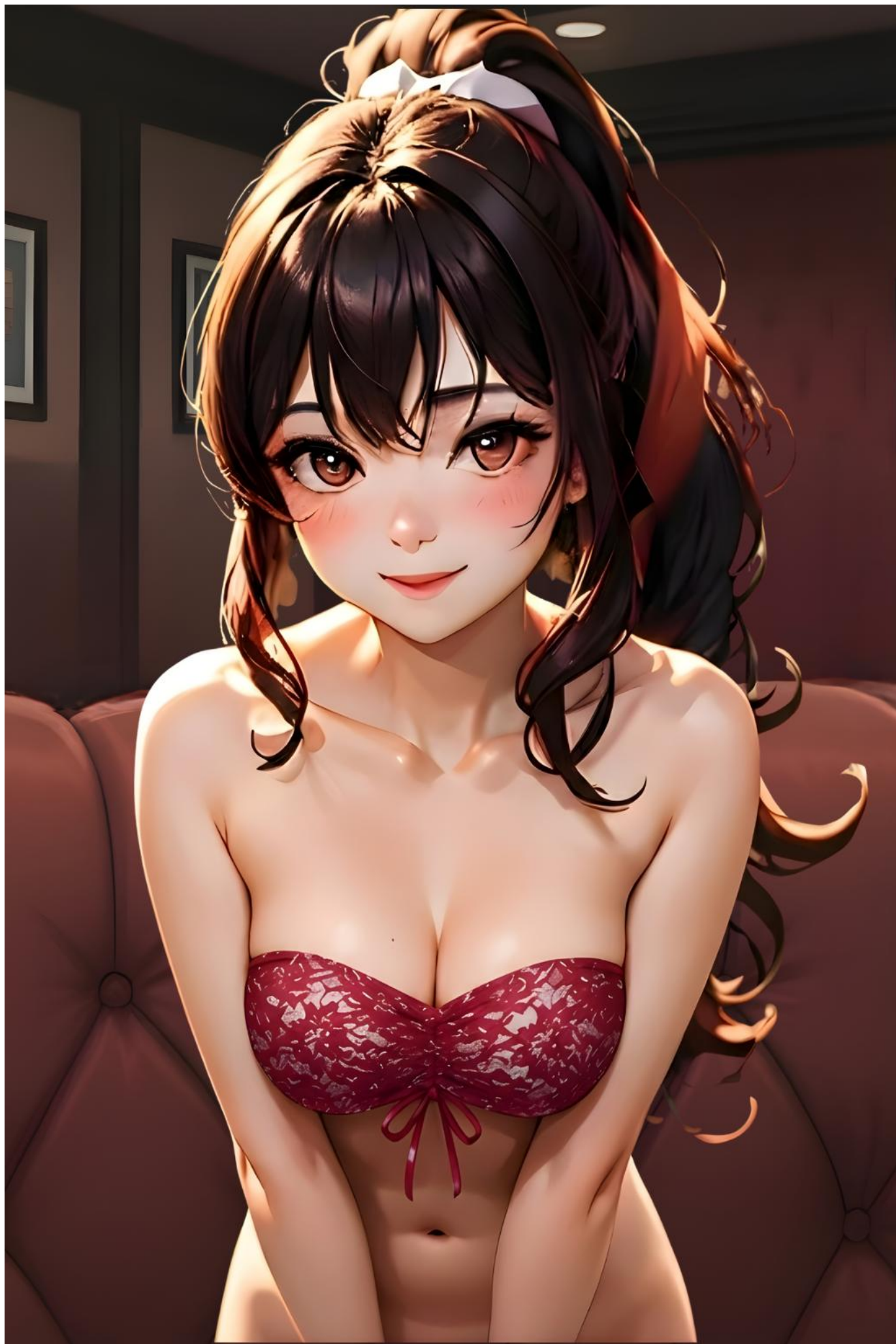


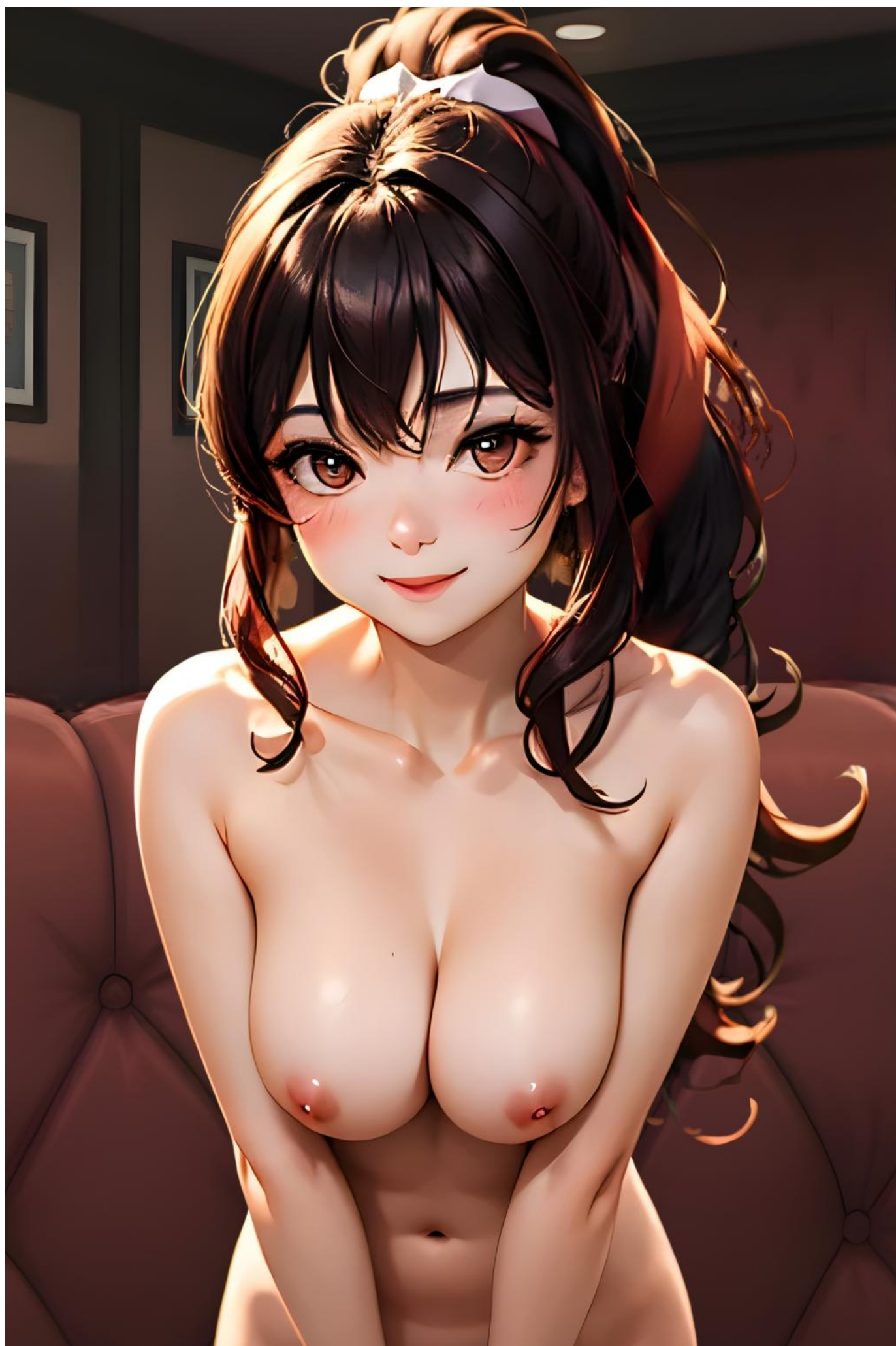


「ん、そうか。それなら、そうしよう。」



(上手い切替えし
さすが、渚ちゃん!)









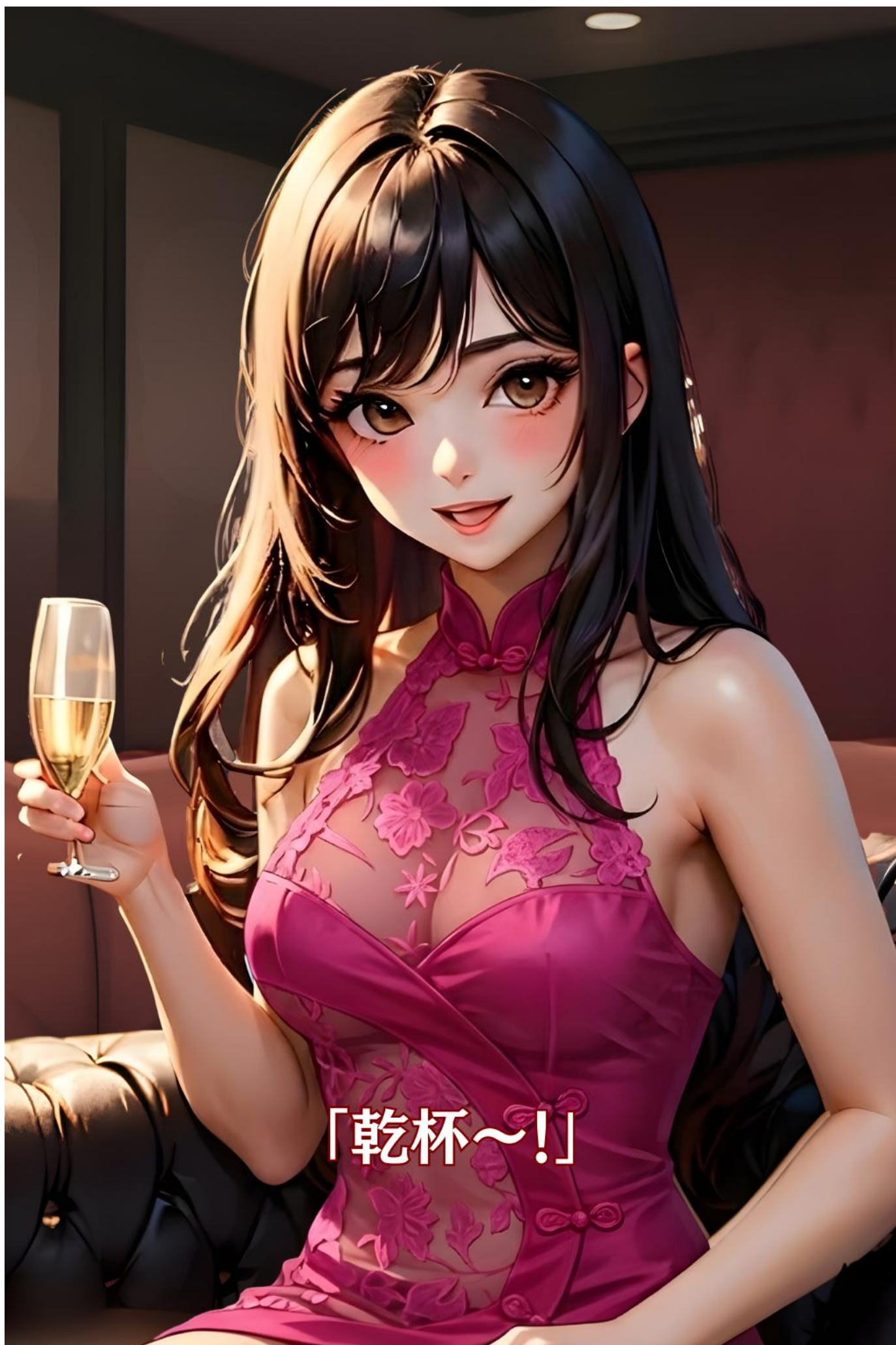
「深淵へ、ようこそ」



「かんぱ〜い!」



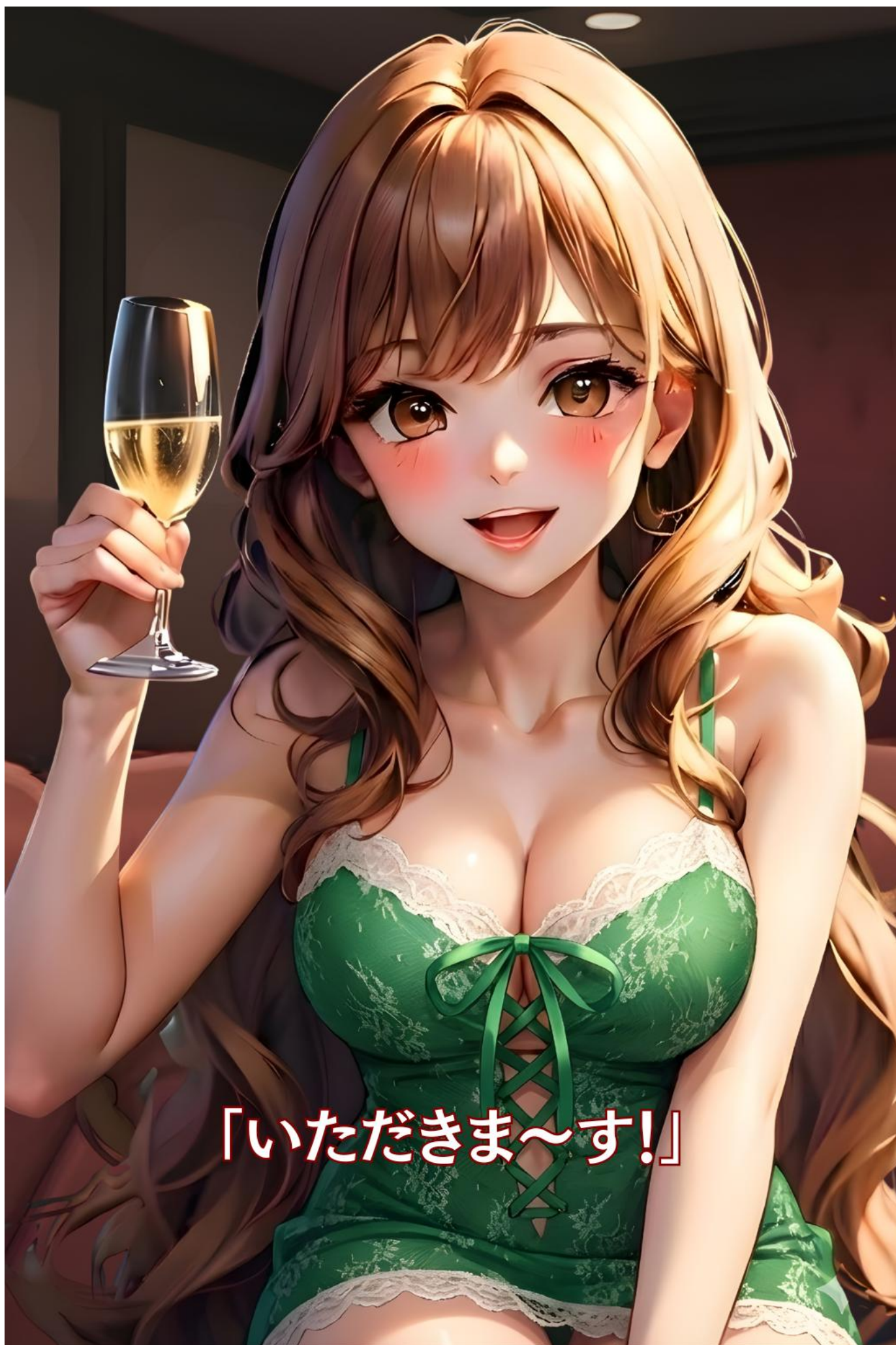




「乾杯〜!」







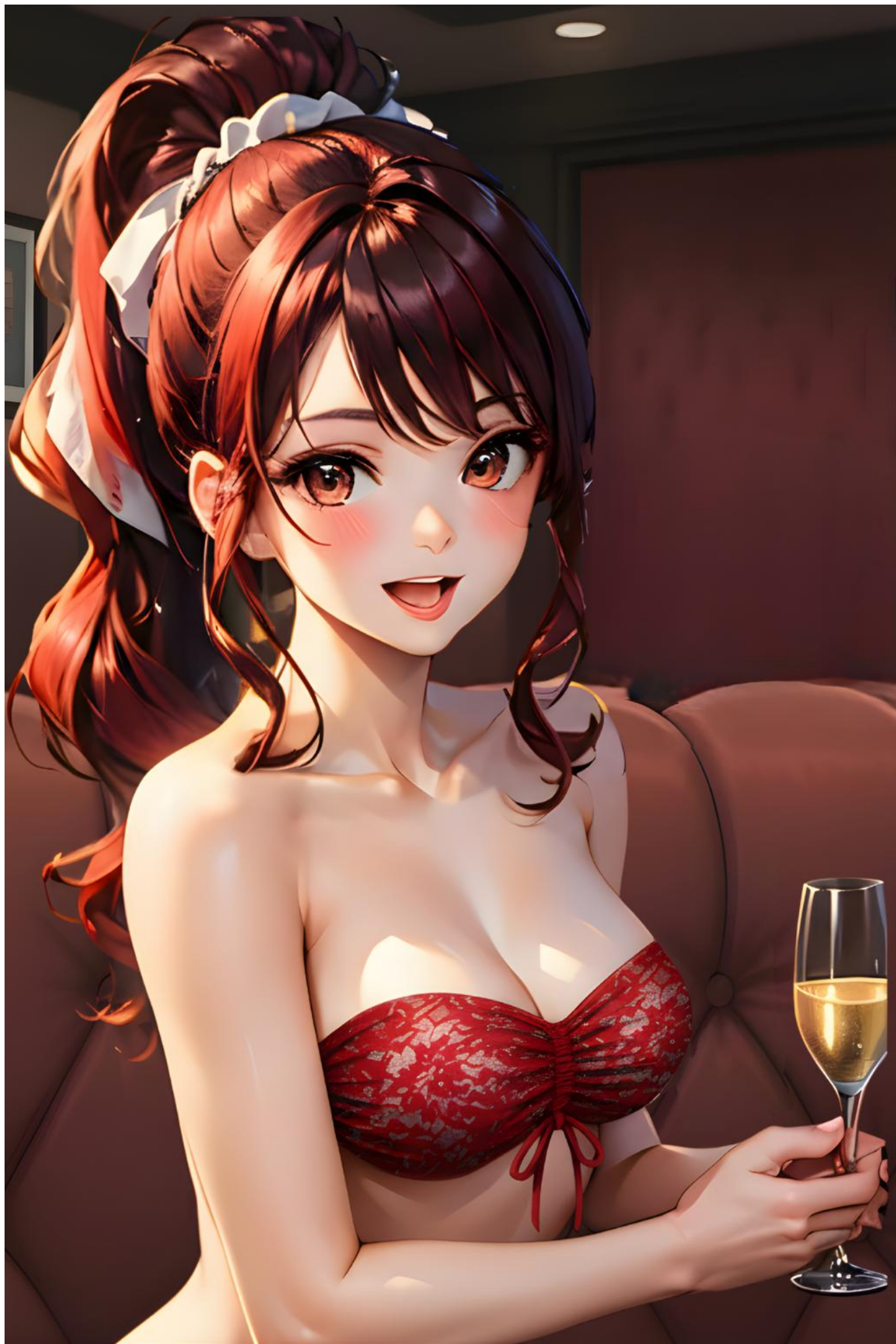
「いただきます〜す!」







「かんぱーい♪」



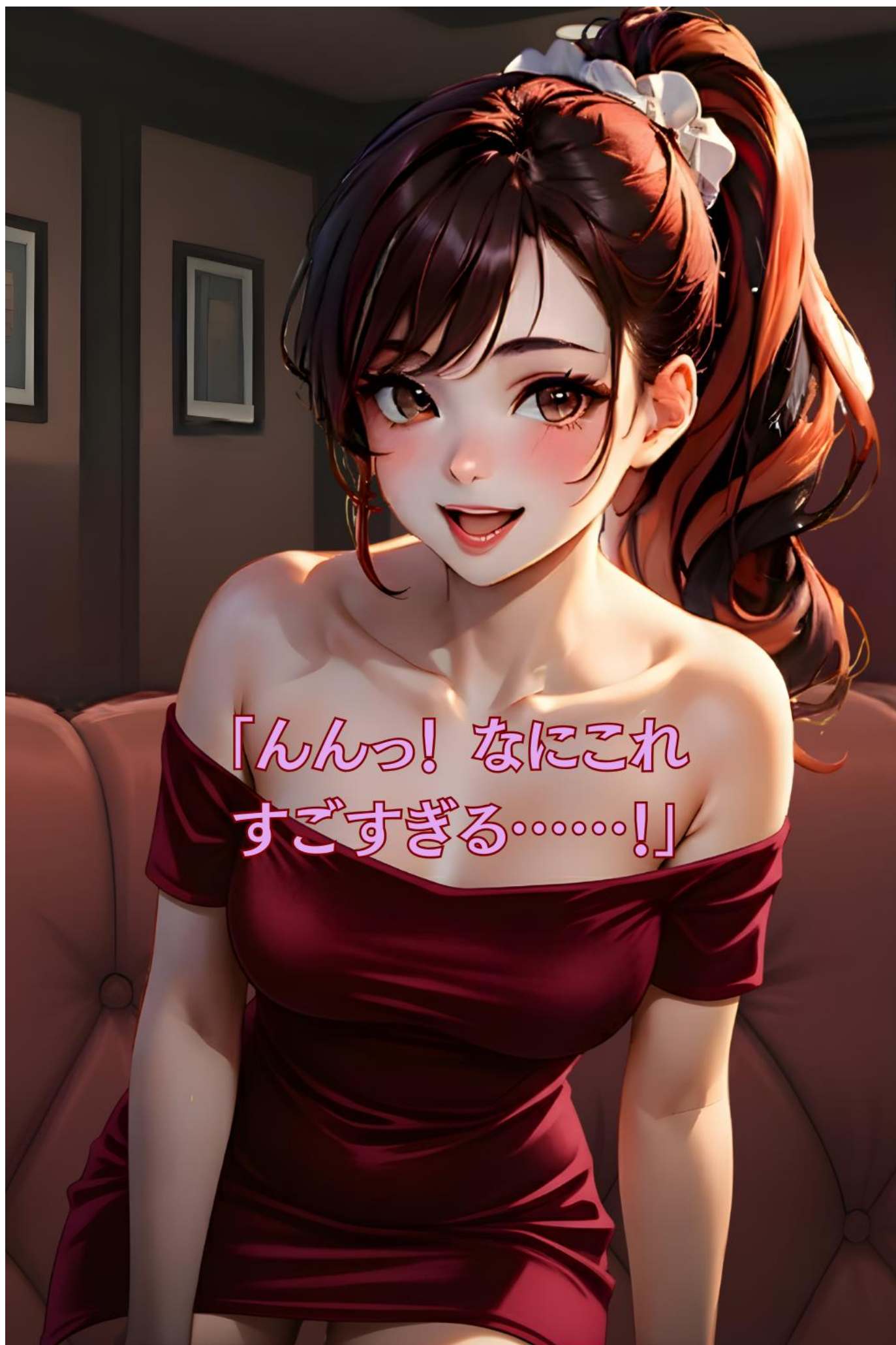




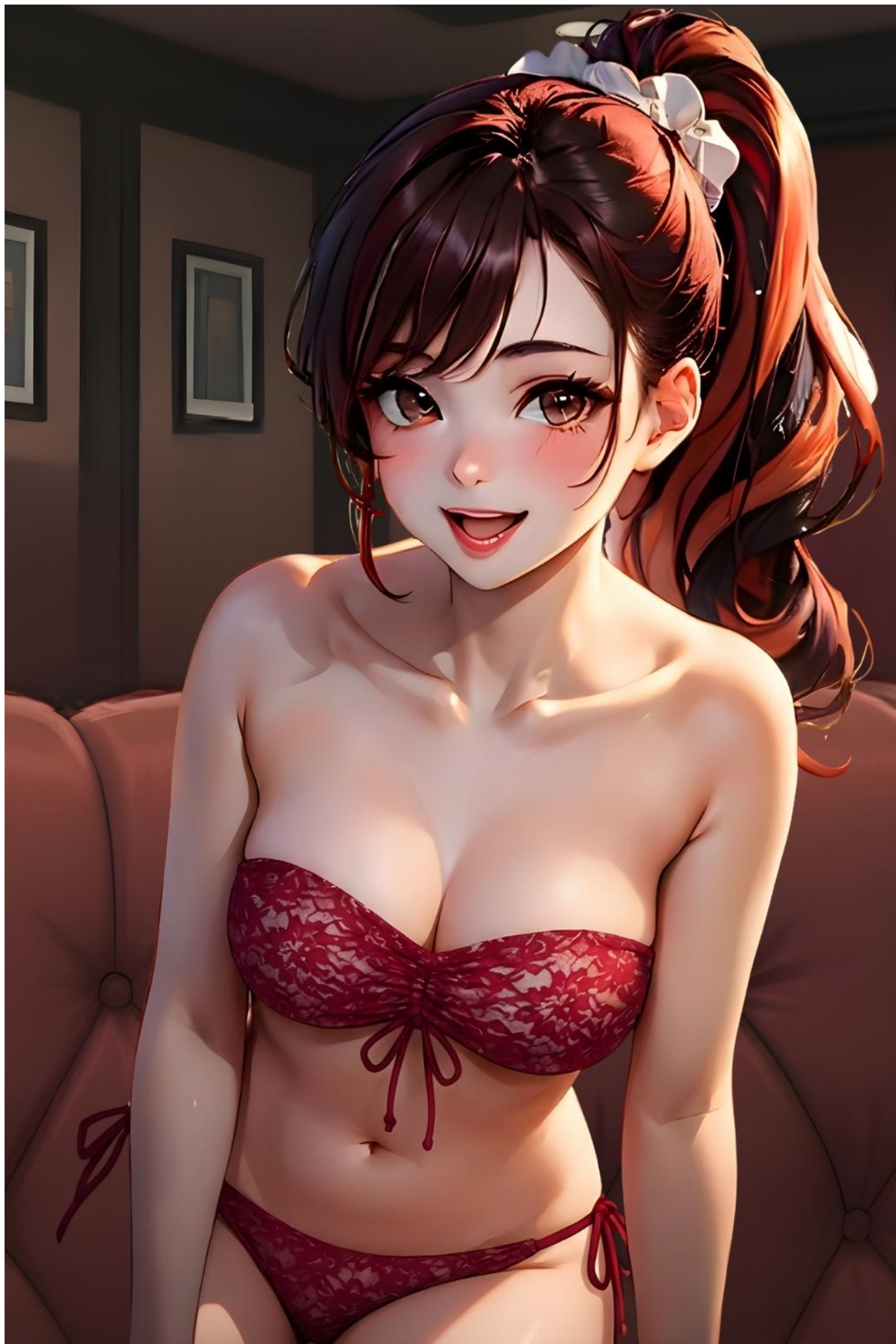
「いただきます」

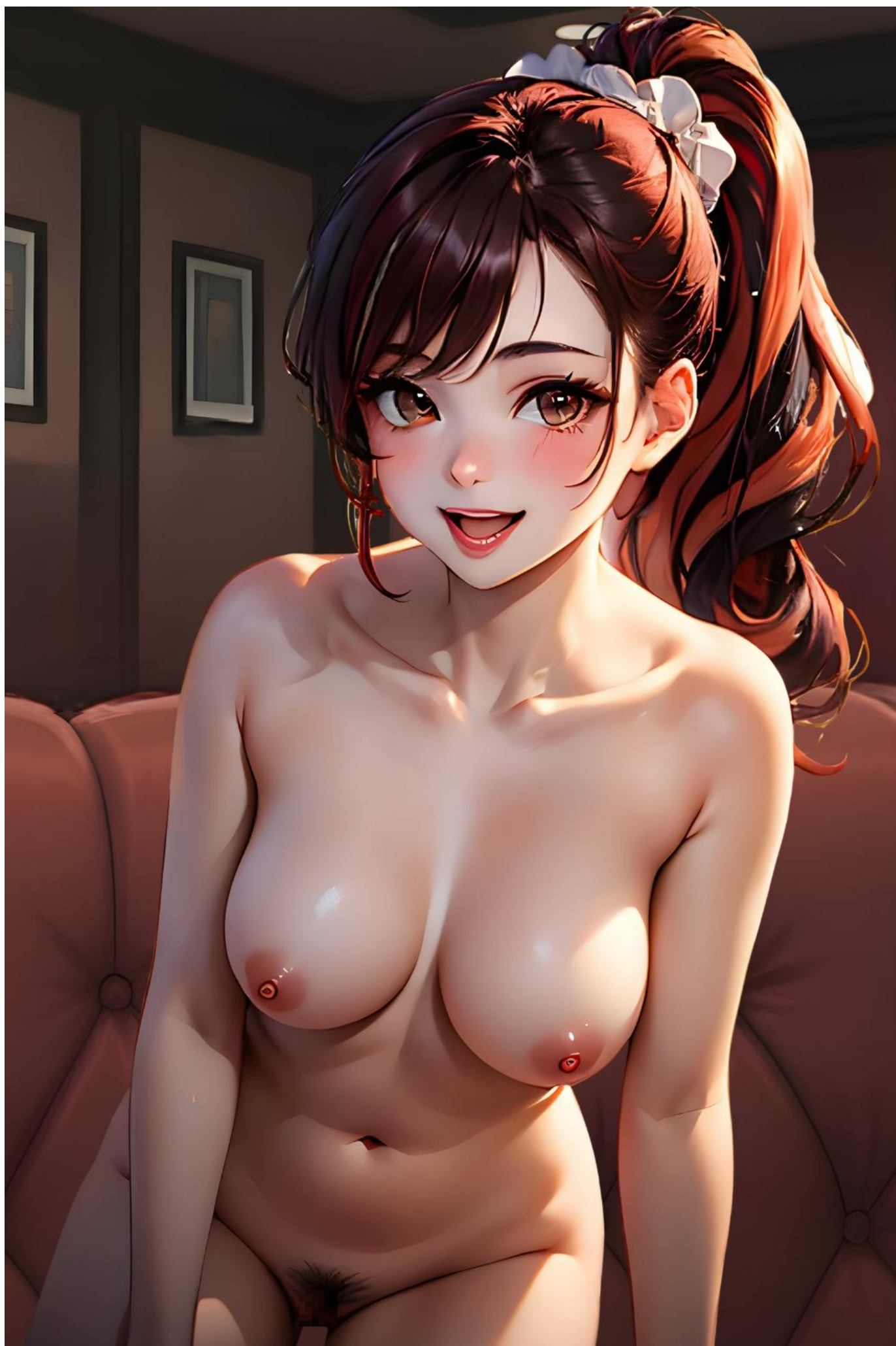






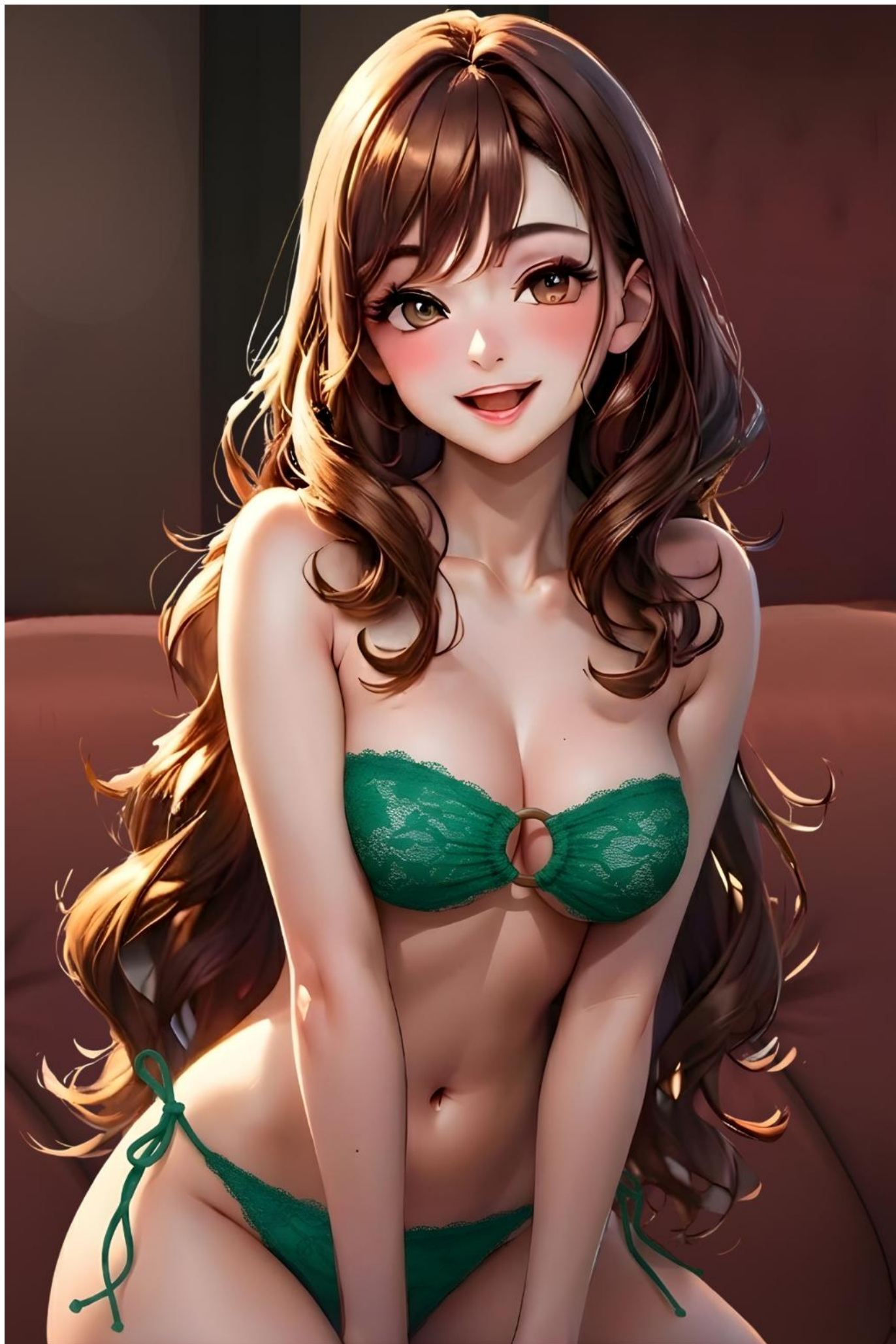
「んんっ! なにこれ
すごすぎる……!!」







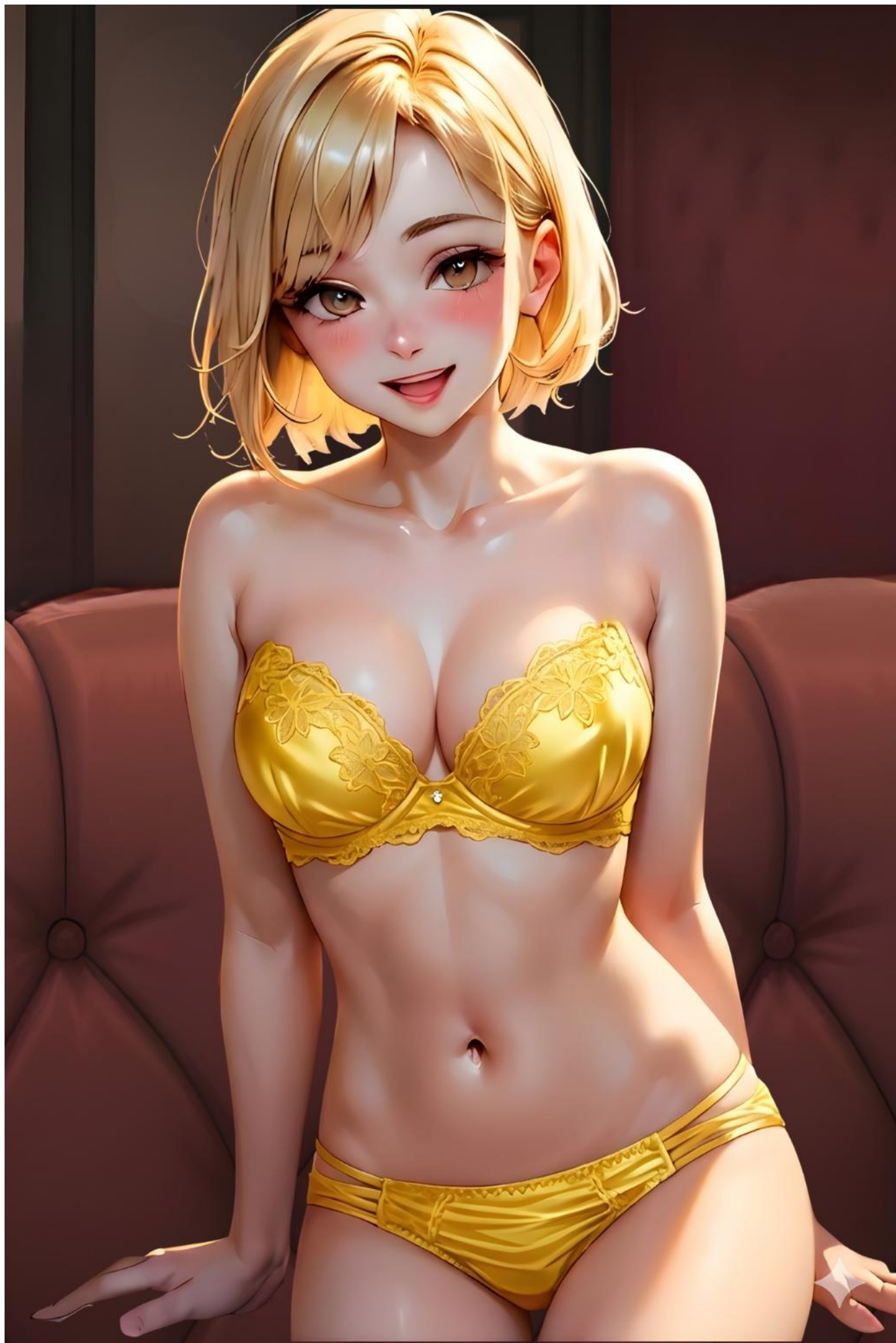
「美味しい……
もう他のじゃ、満足できない」

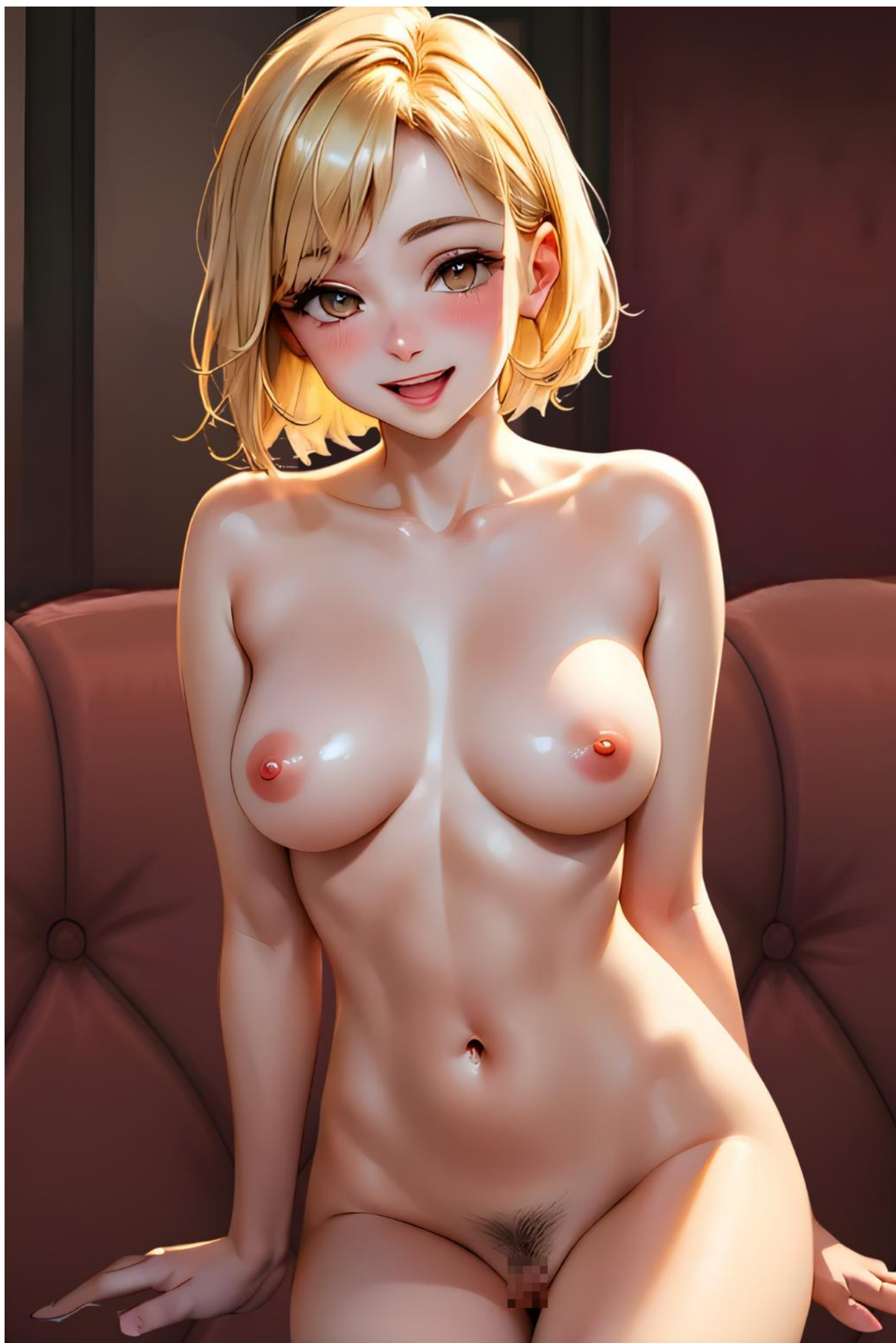






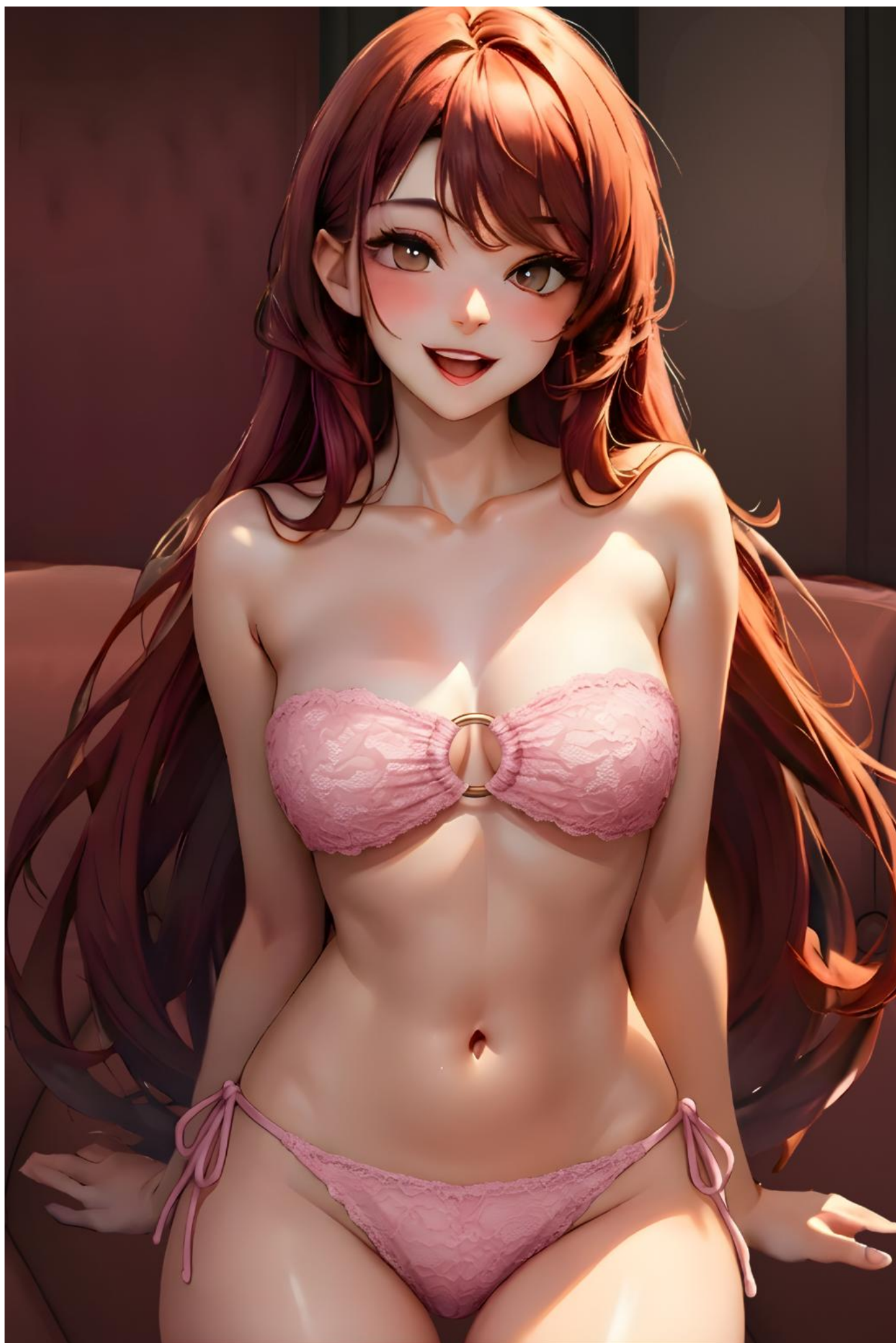
「震えました。これを知らずに
死ななくて良かったです」

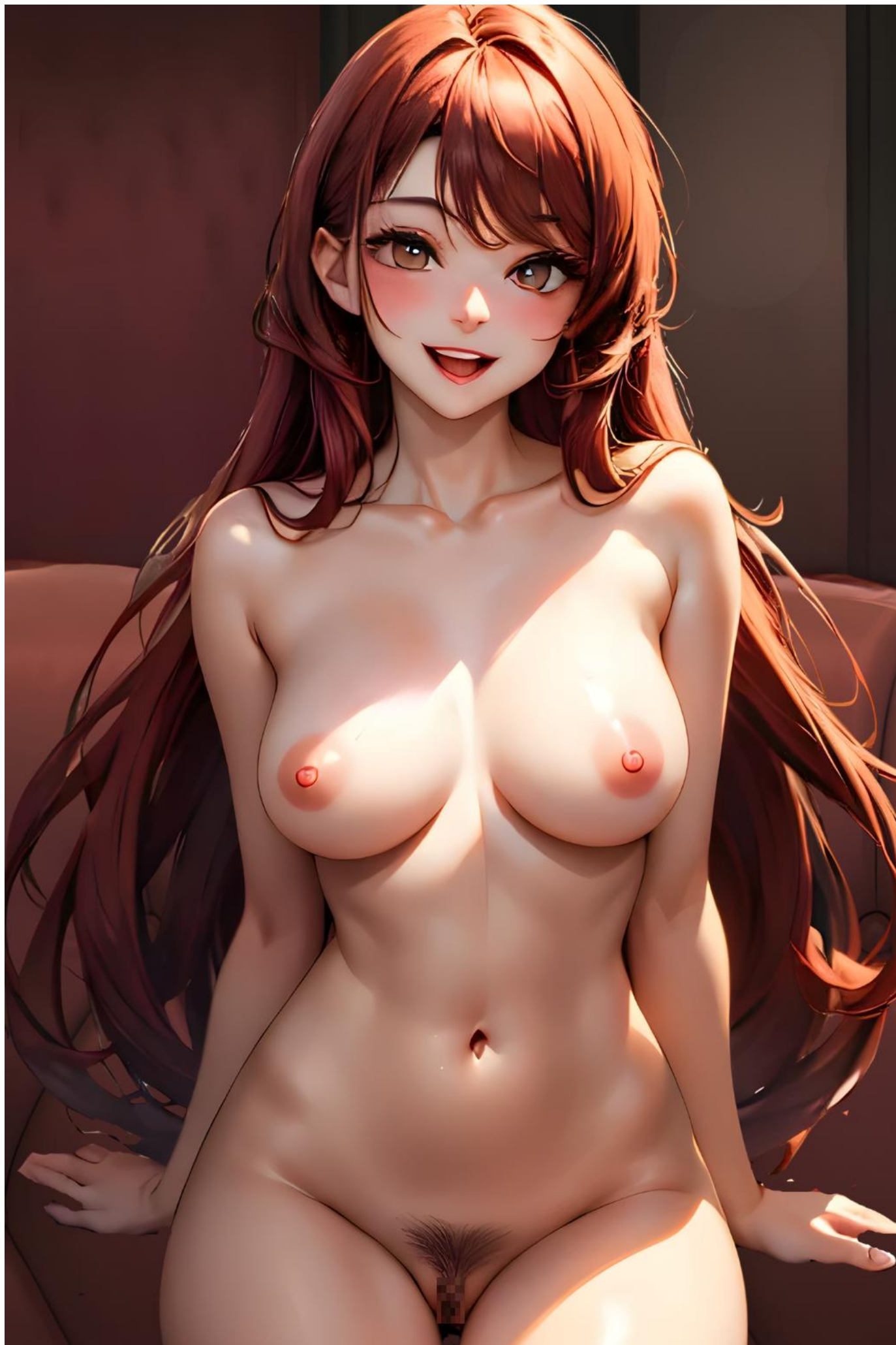






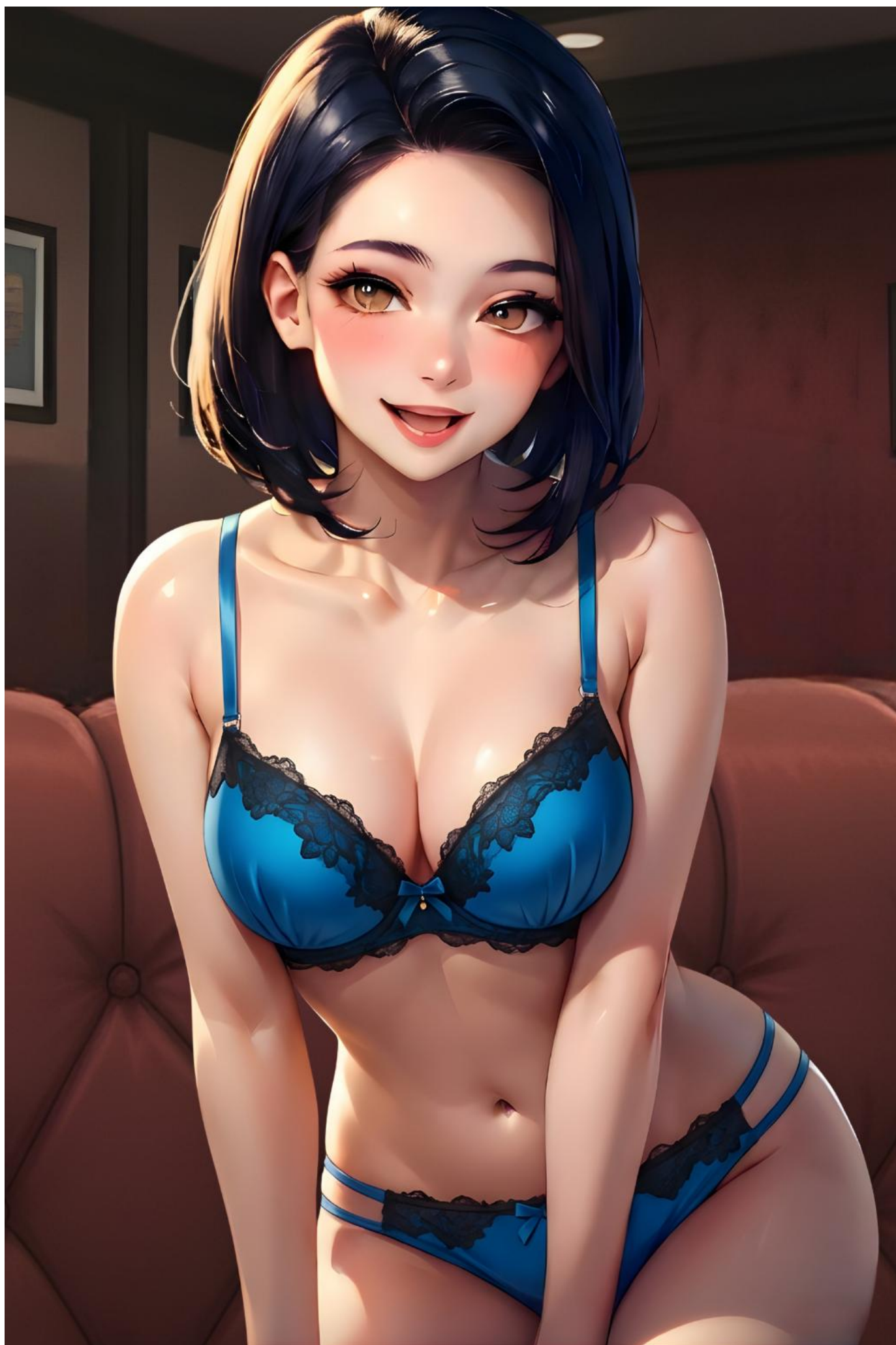
「本物ですね。今後は他のお酒が
水っぽく感じちゃいますね」

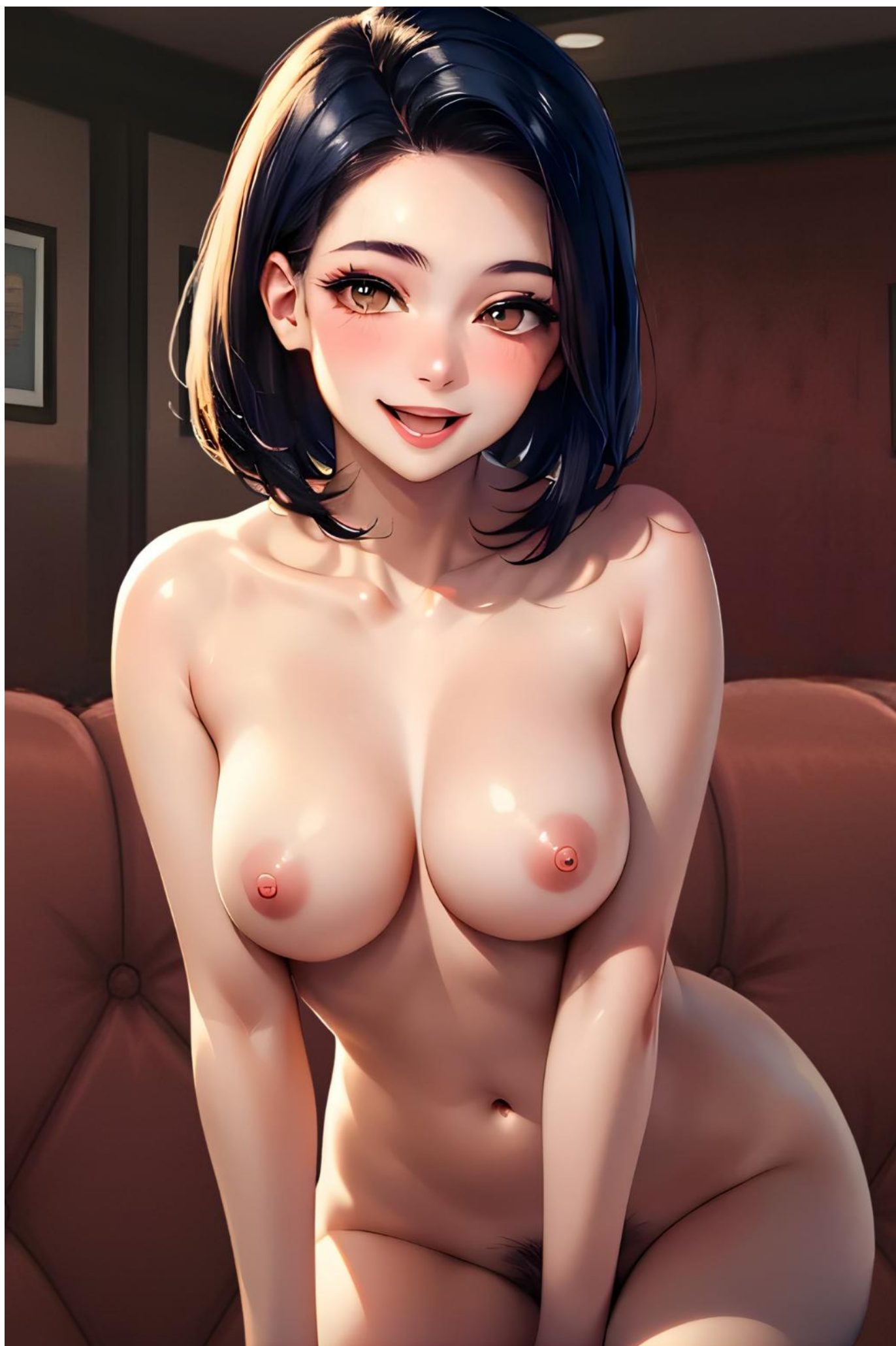






「……深い
まさに奈落に引き込まれるような
味です…」



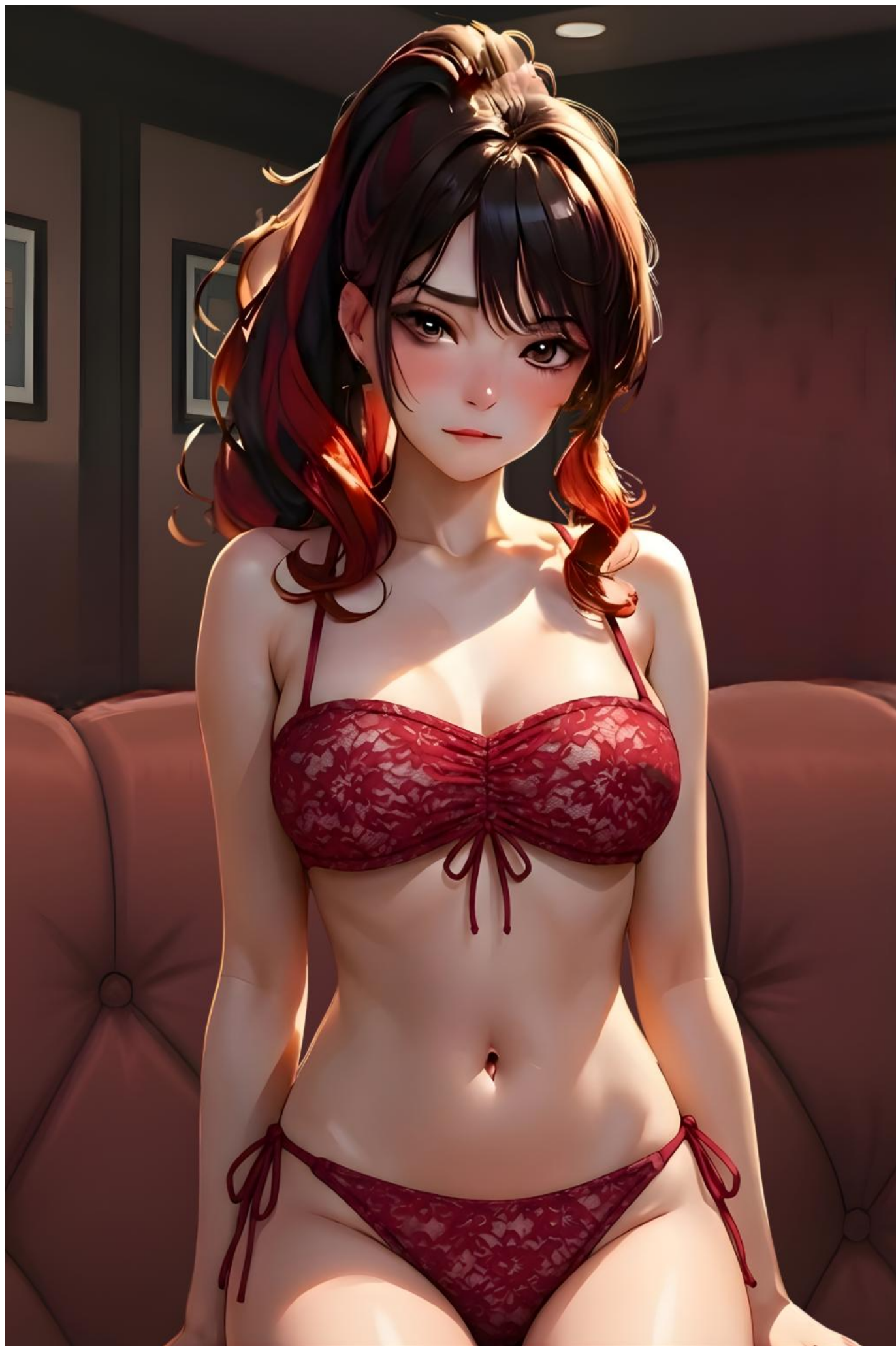




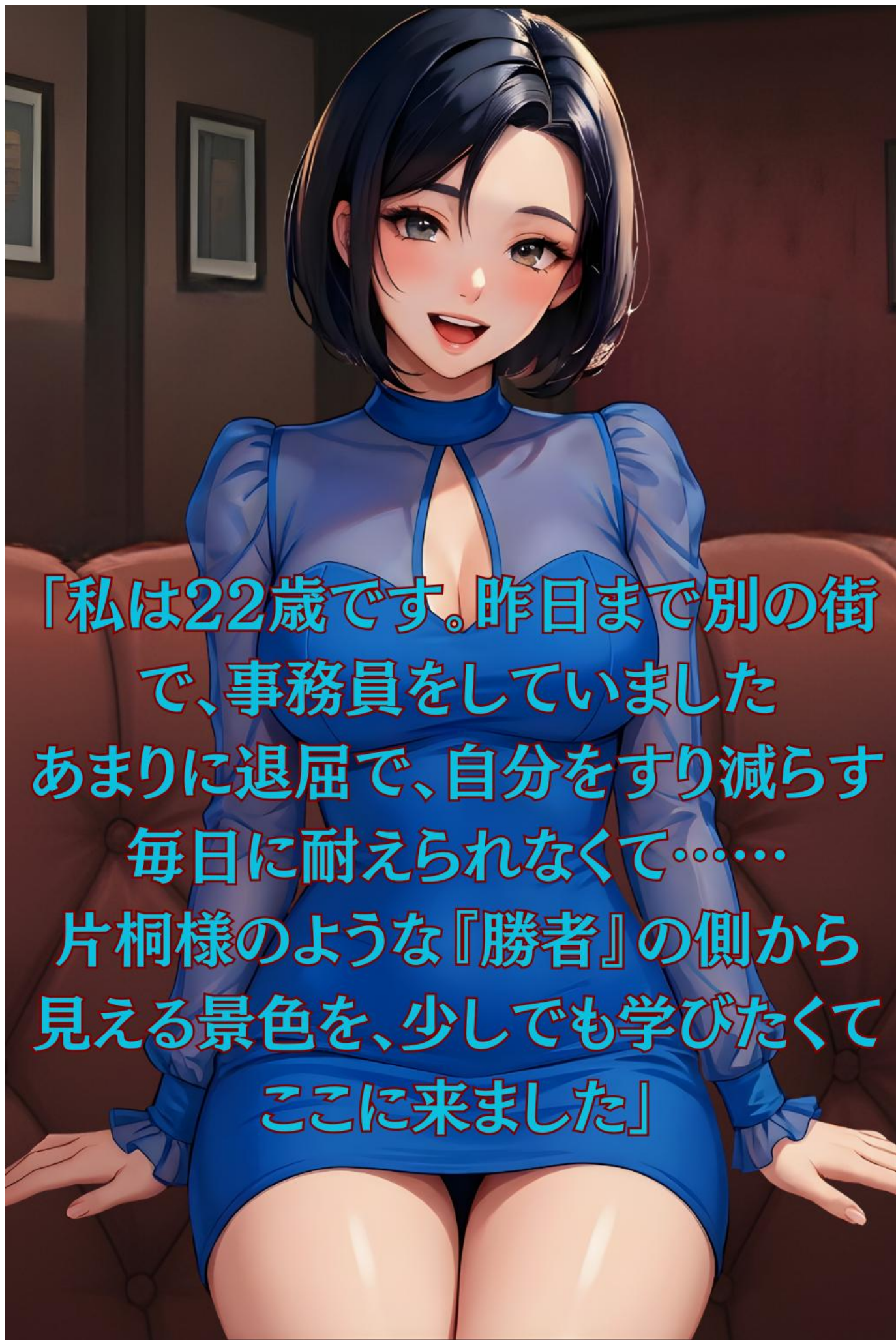
「サキ、今日入店とのことだが
昨日まで何をしていた？
君はいくつだ？」



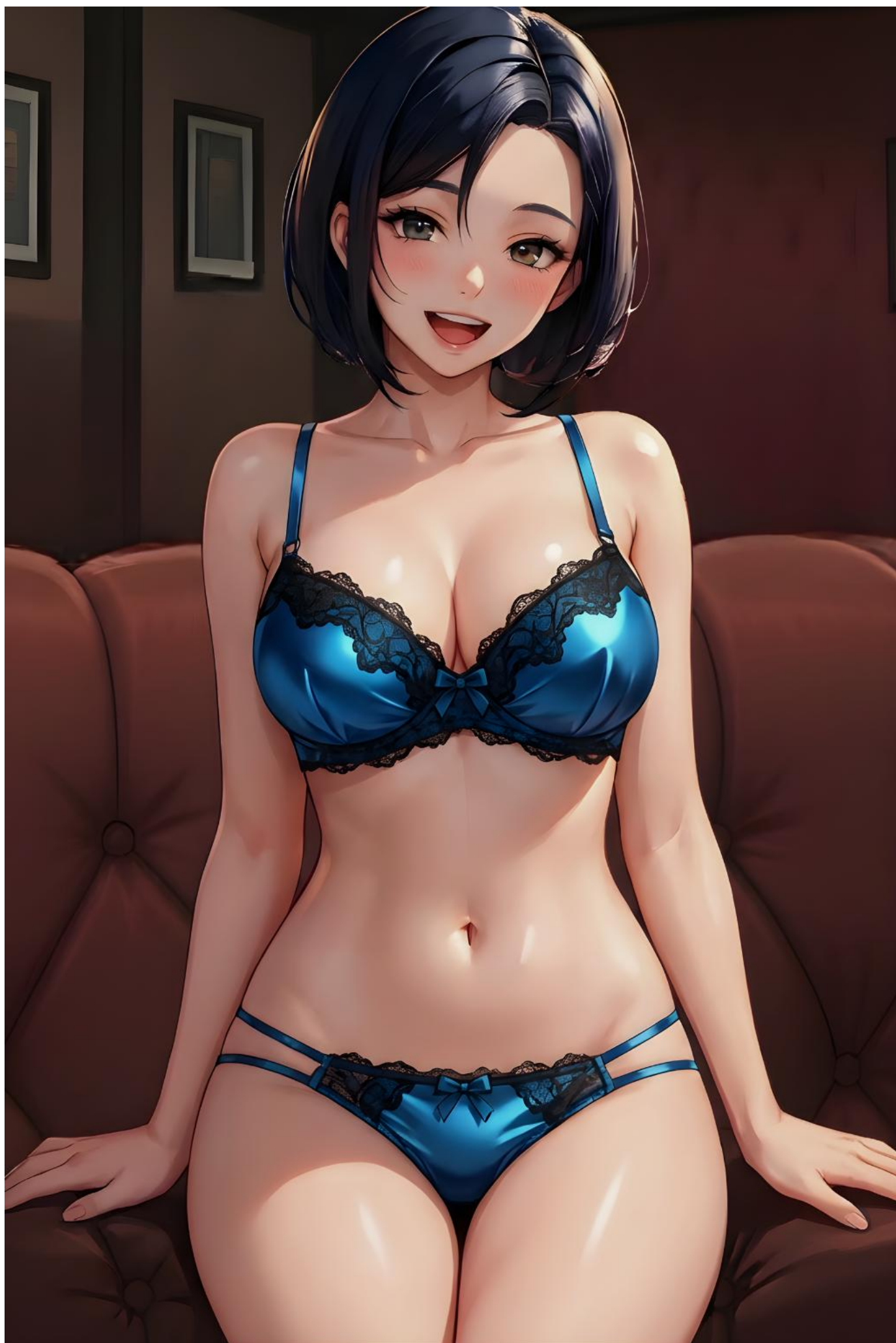
(えっ、そんな質問が来るの？
渚ちゃん、何と答えるの?)

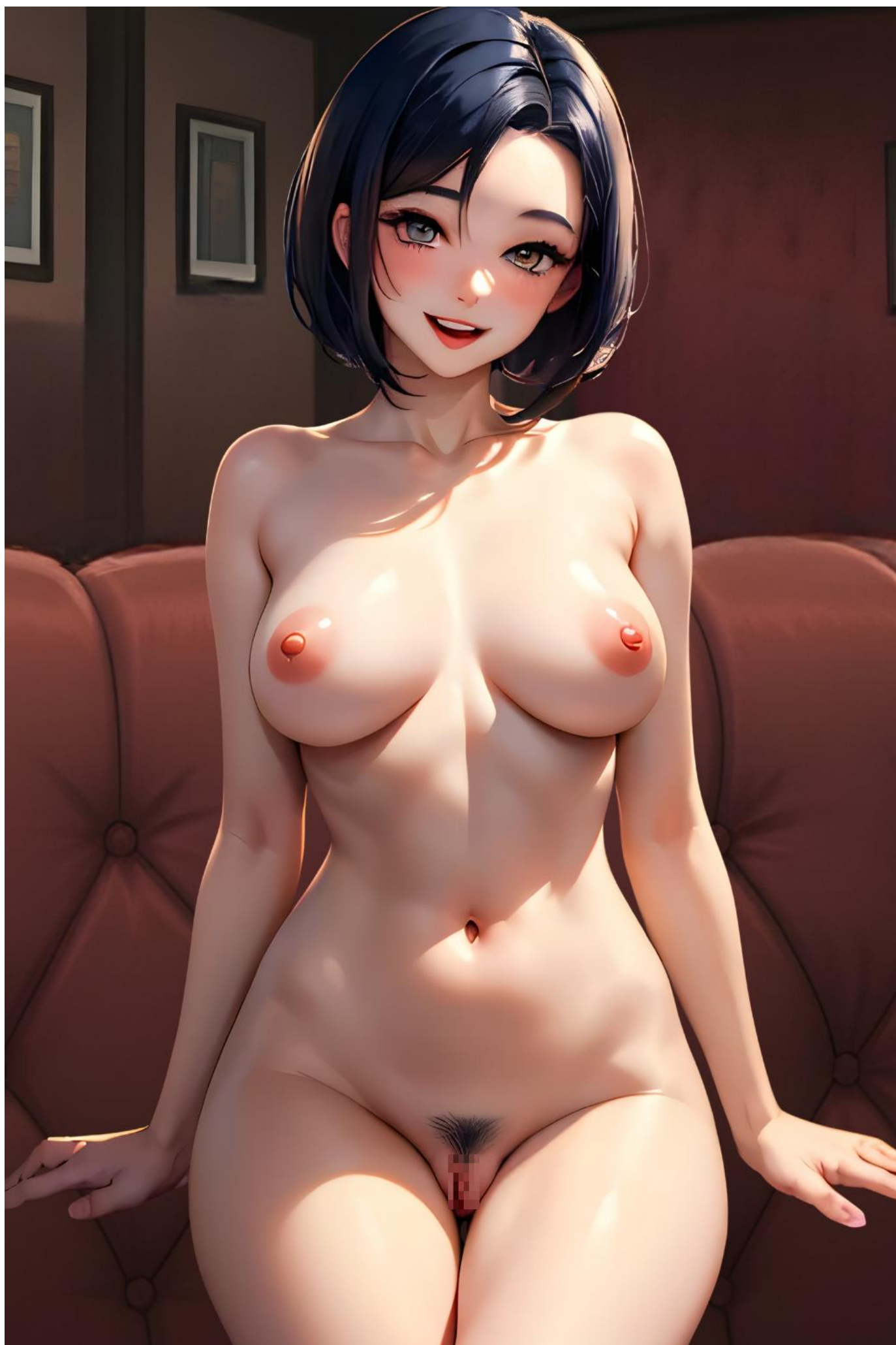







「私は22歳です。昨日まで別の街
で、事務員をしていました
あまりに退屈で、自分をすり減らす
毎日に耐えられなくて……
片桐様のような『勝者』の側から
見える景色を、少しでも学びたくて
ここに来ました」







「……事務職か
その割には、目がいい
人を見る目だ
普通、初日の女はもっと泳ぐ」



「そうでしょうか？
緊張はしています
ただ……片桐様に
失礼があってはいけないと思って」



「“失礼があってはいけない”か…
その目だ! 怯えていないのに
媚びてもいない
自分が、選ぶ側の人間だと
思ってるだろ?”」



「そんなこと……
考えたこと、ありません
私は選んでいただけのよう
努力するだけです」



「いい、とてもいい
嘘をつくのが下手だが
隠すのは上手い」

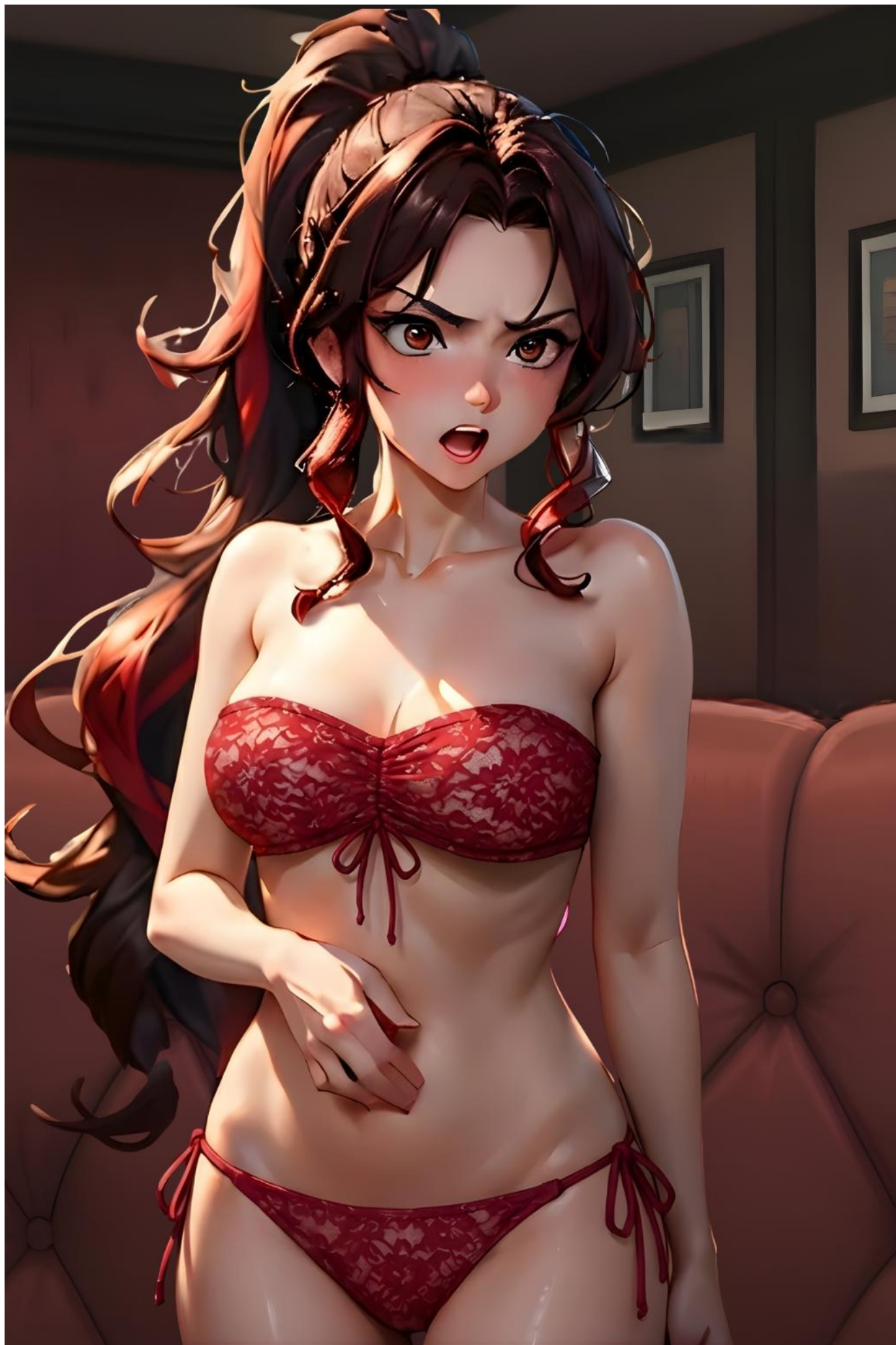


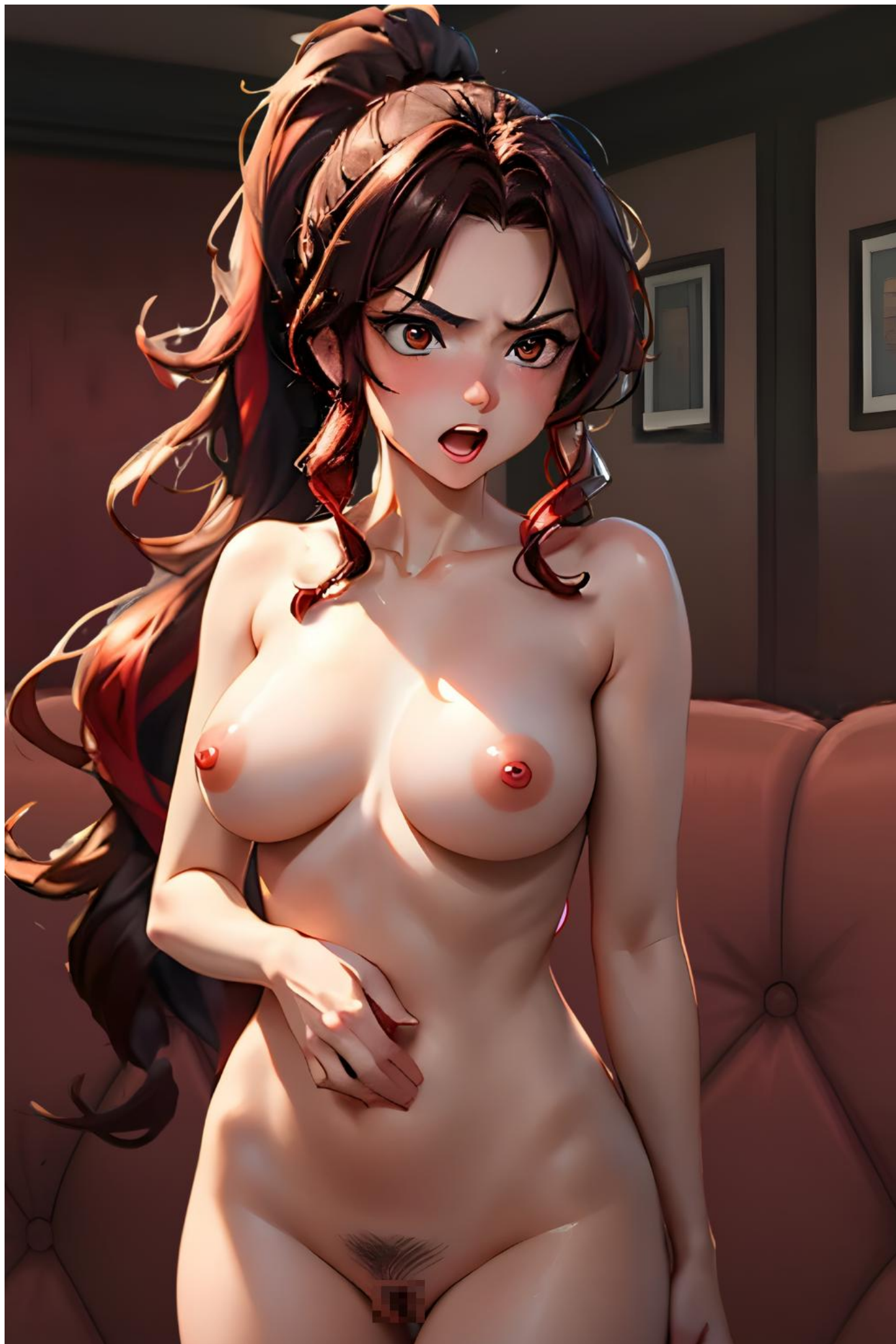
キラッ!



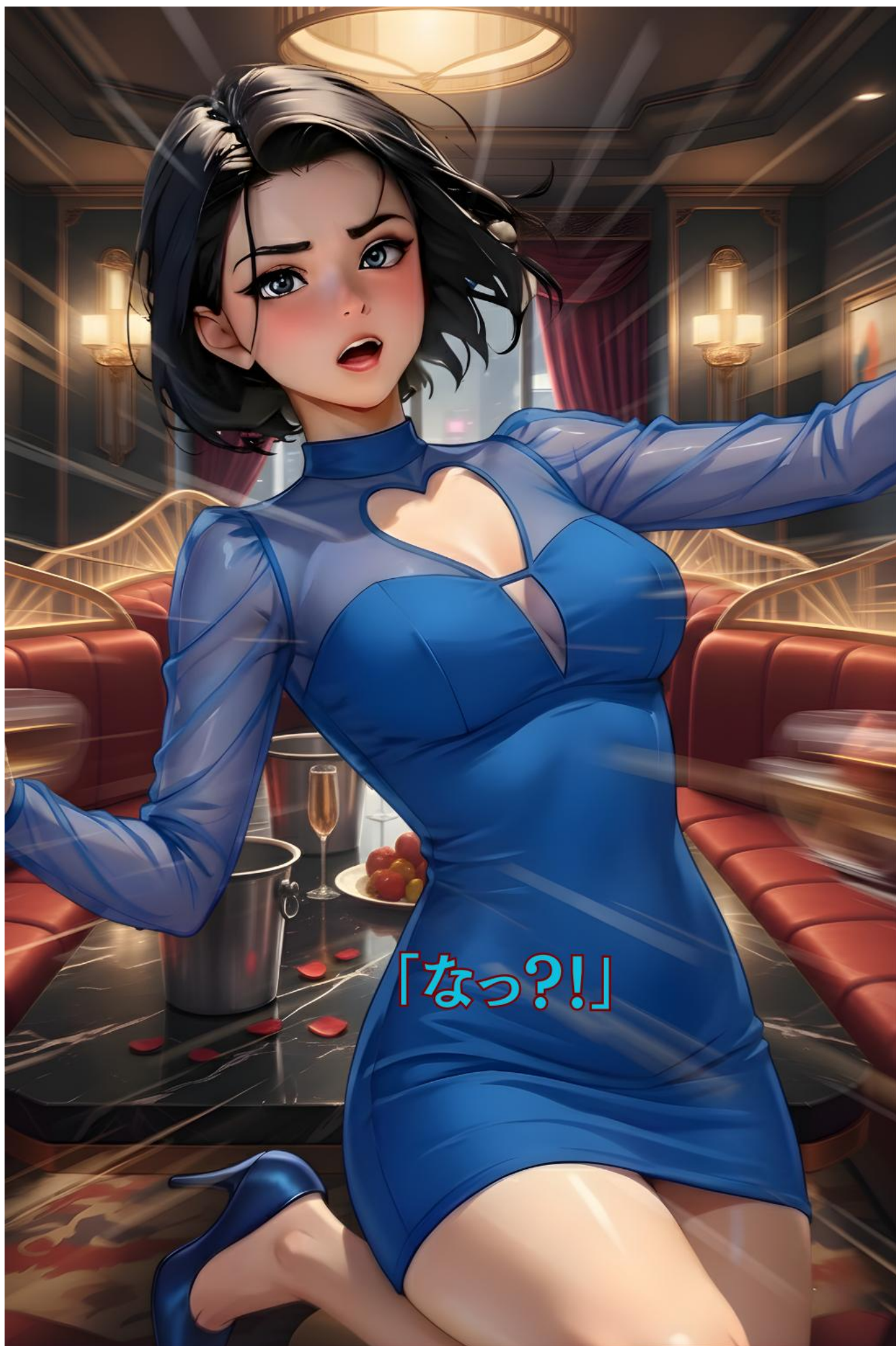


(危ない、渚ちゃん!)

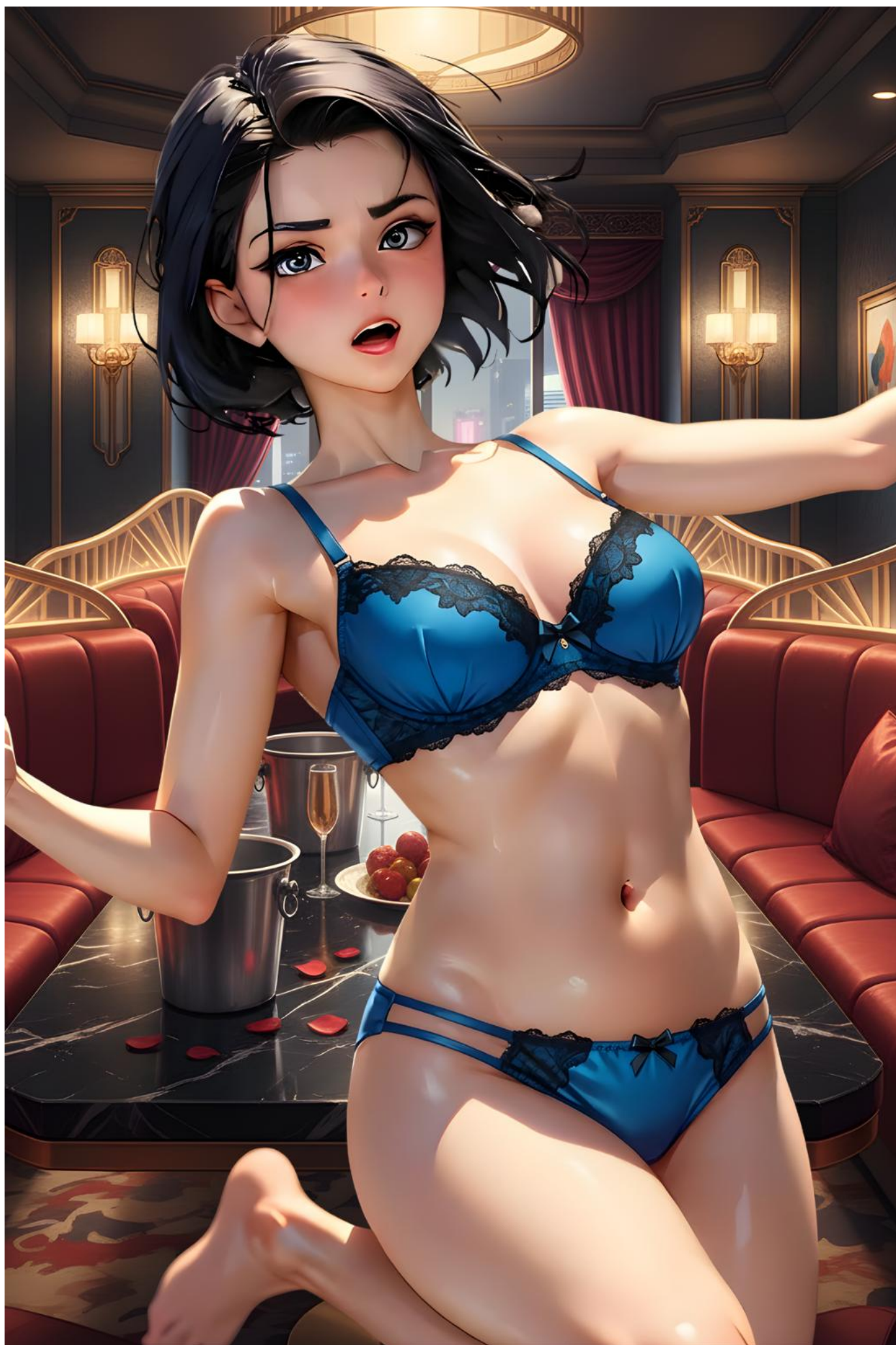








「なっ?!」

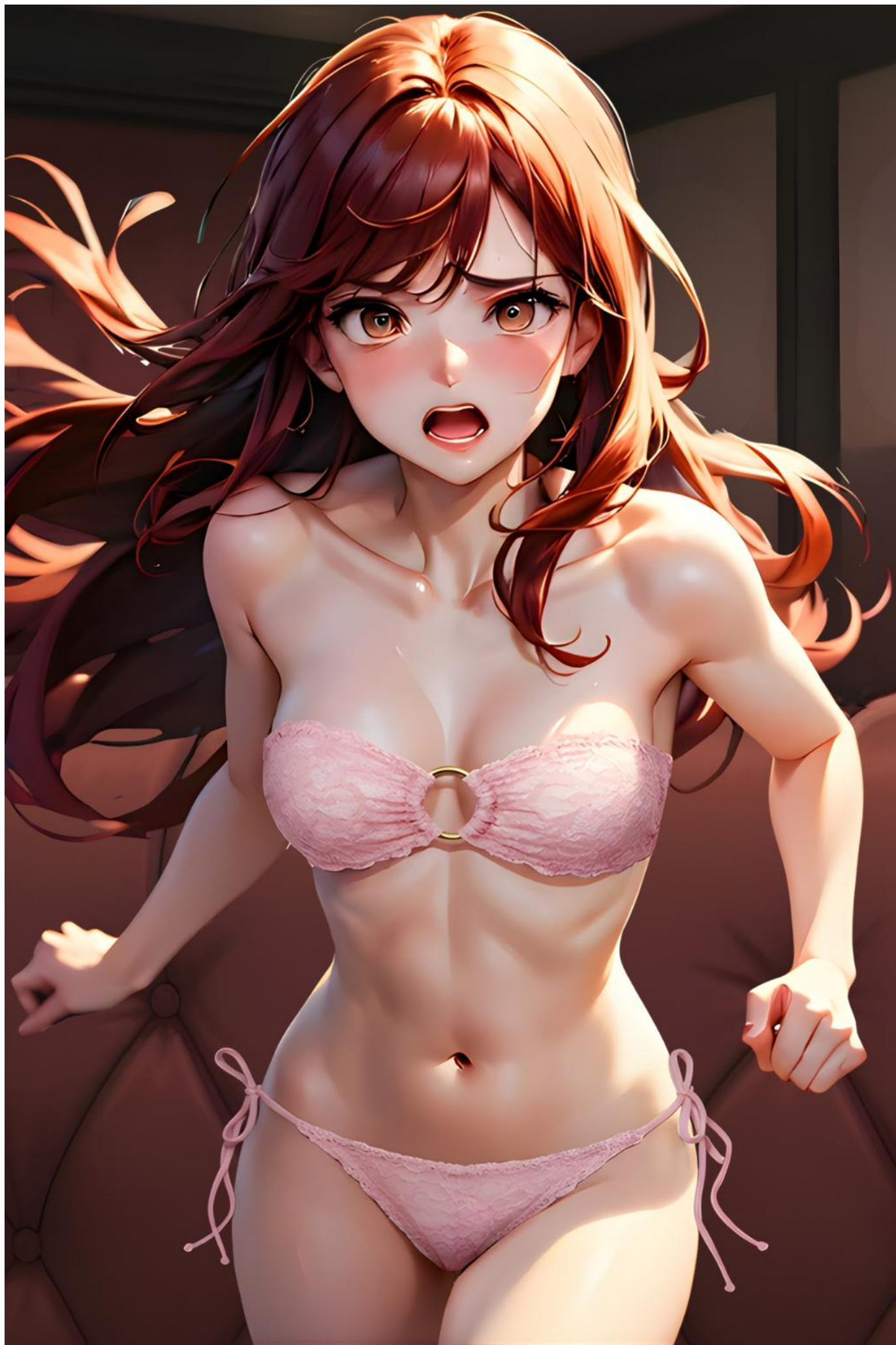








「きゃあ！」







「きゃあ！」



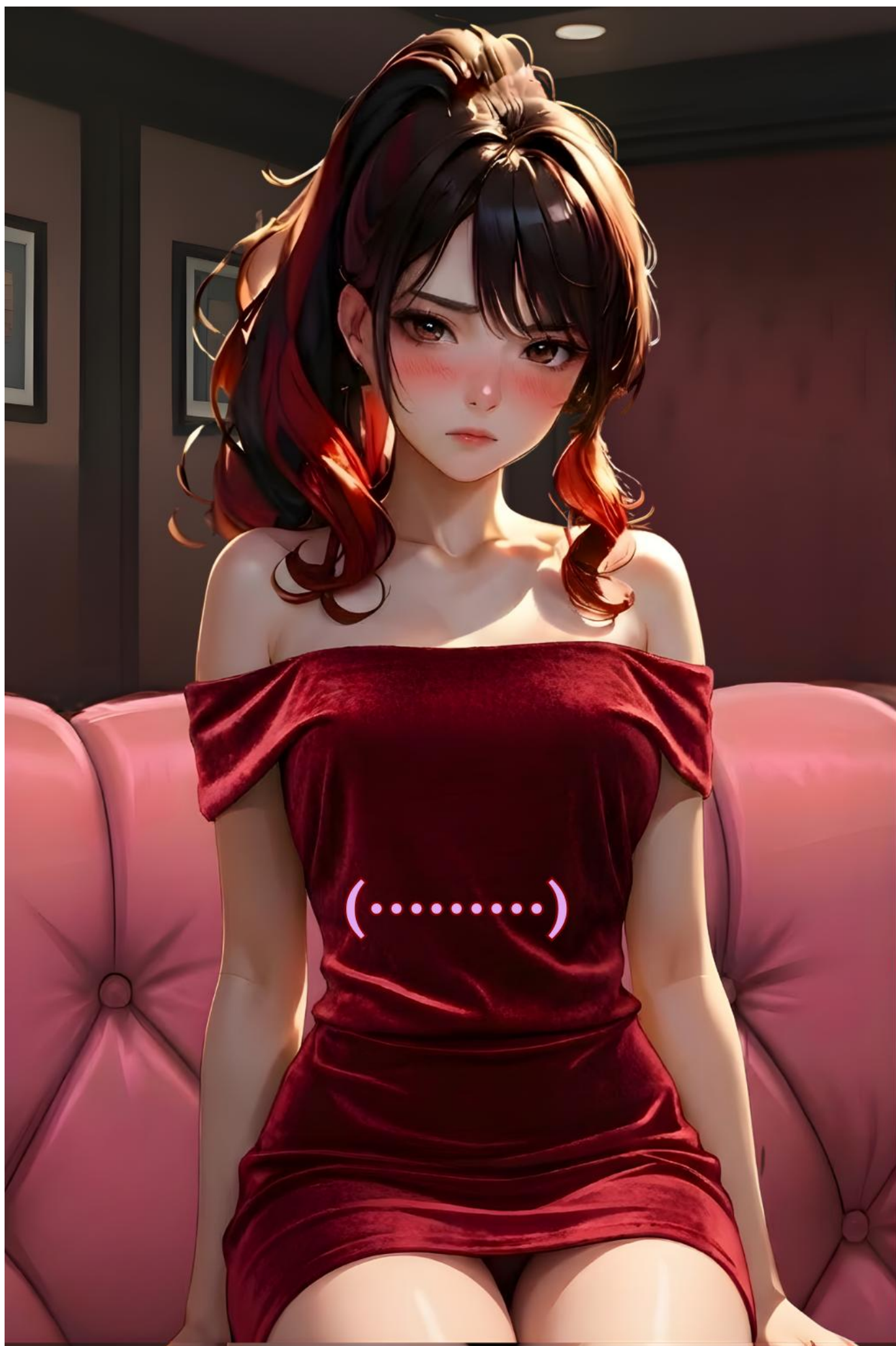




「わっー!!」





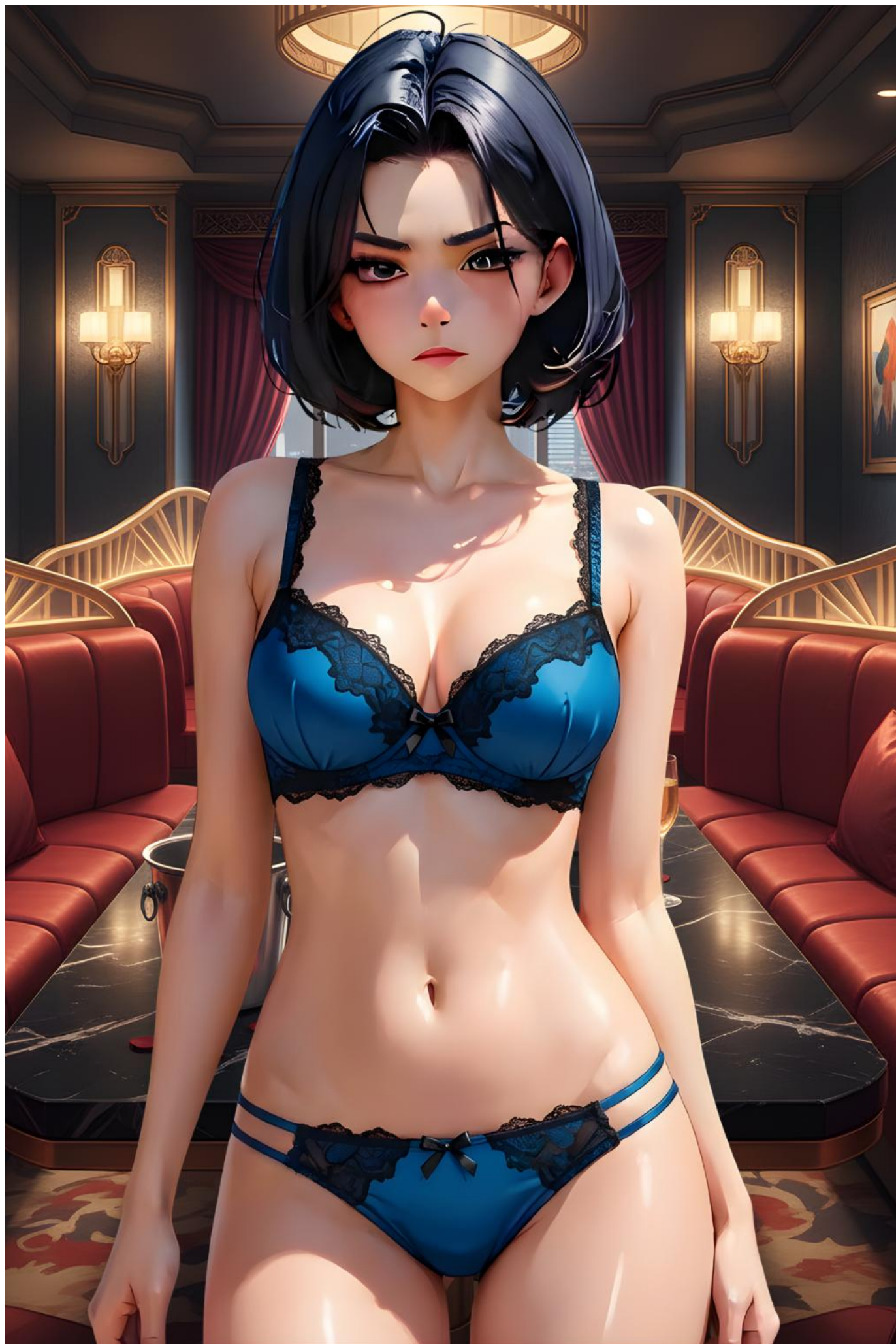




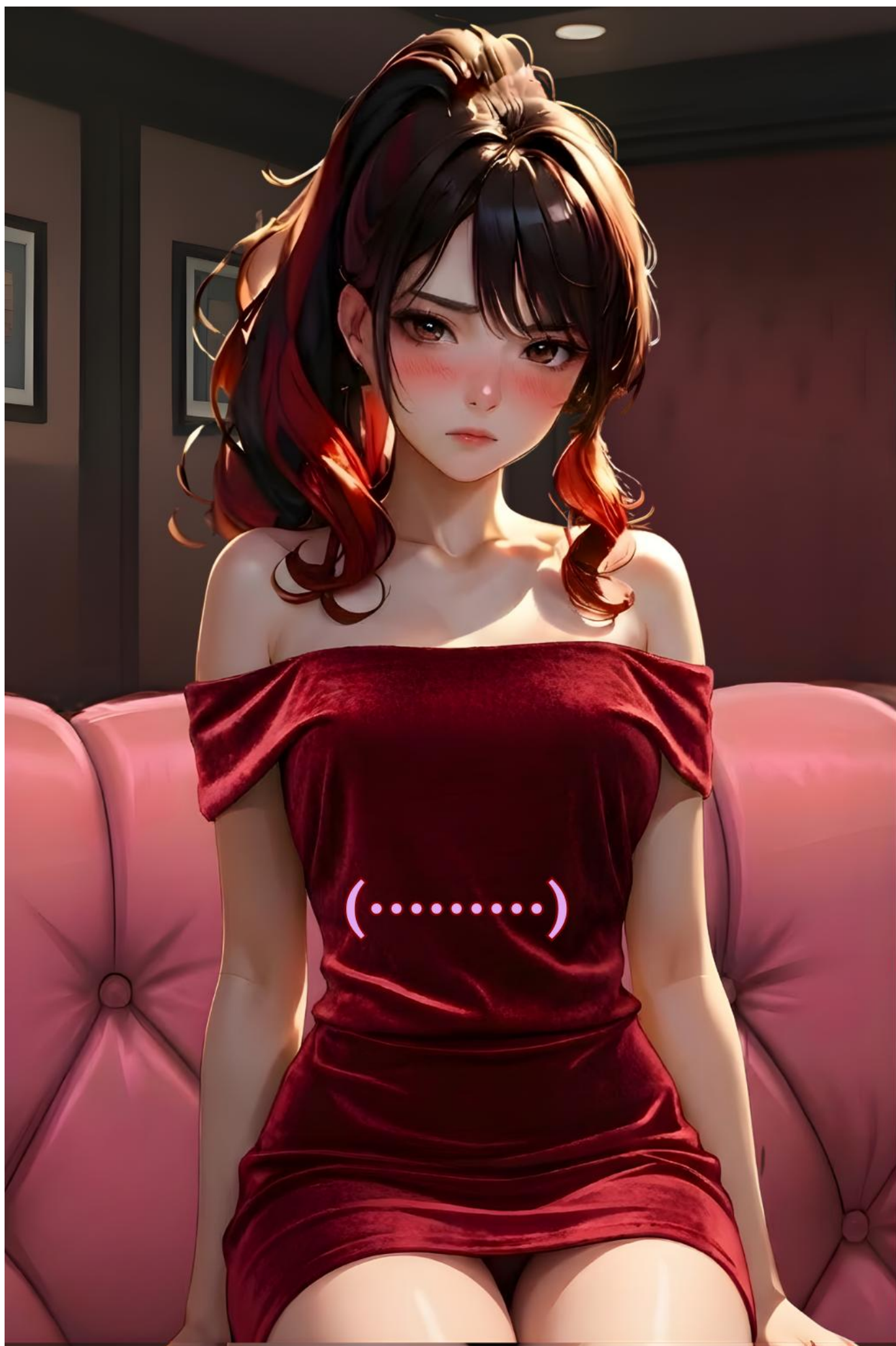
「その身のこなし
事務をやっていた者の
動きではないな」



(しまった、身体が反応してしまった)







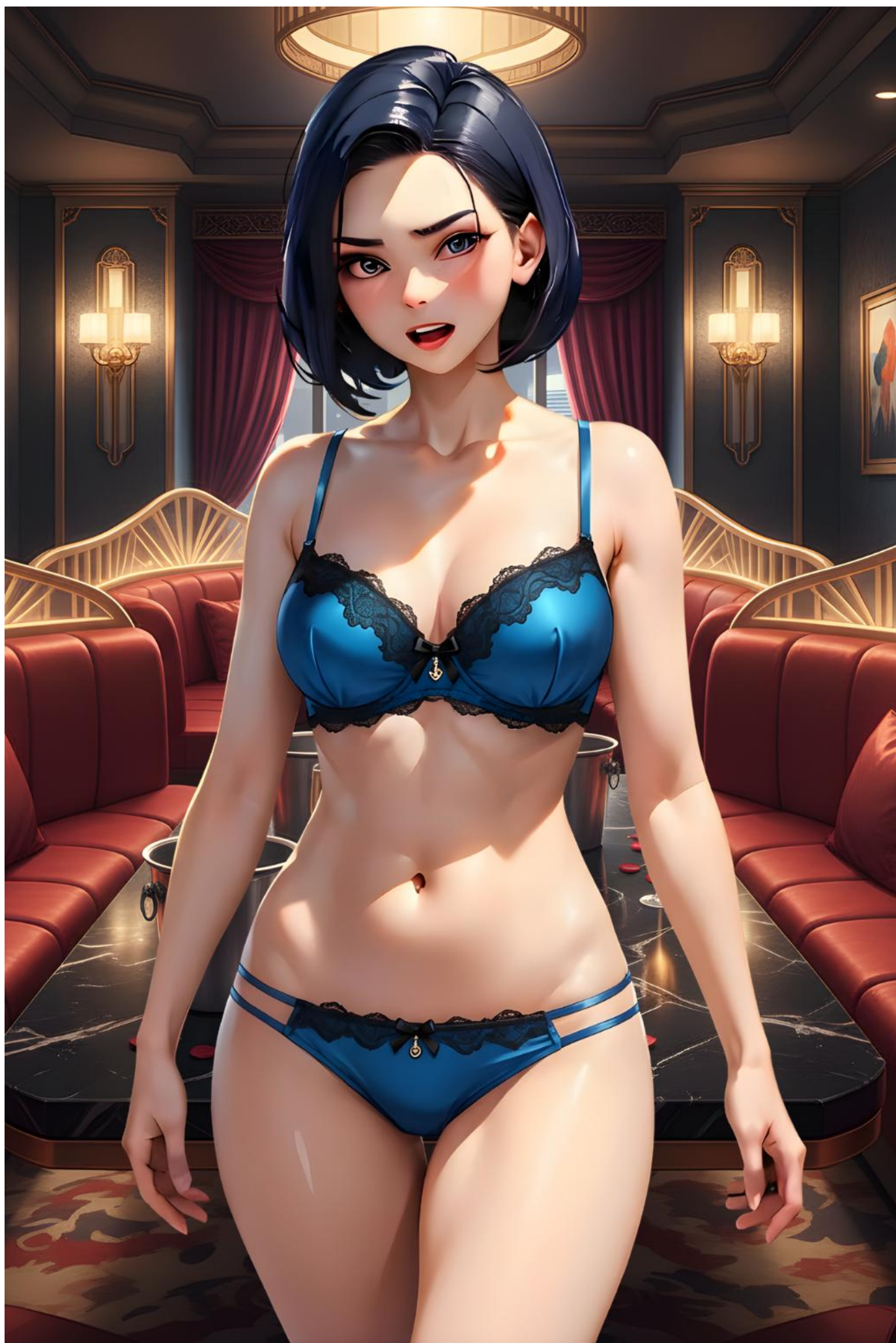


「サキ、貴様、“サツ”だな？
潜入捜査か？」





「ばれちゃいましたか、そうです
私は警察、よくわかりましたね
貴方が言うように、これは潜入捜査
さすがですね、スネークさん」







(なっ、何言っちゃてるの、渚ちゃん!)



「ほう、あっさり認めるか
それで、警察が何のようだ？」



「それはもちろん
あなたを逮捕するためですよ」



「小娘が、俺を逮捕だと？」



「...でも、今すぐ逮捕はできません
まだ“芸術品”を見せて
もらっていないので」



「芸術品？」



「メデューサ・アイ!
噂だけの駄作か
それとも“本物”か
たぶん、はったりだと思いますが…」



「噂だけの駄作？」

トン!





「スネーク、麻薬取締法違反で
あなたを逮捕します!!」







「サキ、俺は君が気に入った
俺のところに来ないか？
”サツ”なんかやっているよりも
良い思いができるぞ」

サンプルは、ここまでです。

全てをご覧になりたい方は

ご購入をお願いいたします。